

I 章 看護への産婦の評価と助産婦の意見

1 節 母親学級と退院指導

多くの病院で妊娠中から入院中にかけて様々な保健指導が看護職によって熱心に行なわれている。また、今後保健指導に力を入れたいという意見や、産婦側の評価を知りたいという意見もあり（P82）、看護職側の関心は高い。

ここでは、妊娠中の母親学級や個別の保健相談と、入院中に行なわれた各種の退院指導の2場面をとりあげ、産婦に「実行度」「役立っている感じ」を尋ねた。

1 妊娠中の母親学級・保健相談についての産婦の意見

1) 受講率と実行率

表1-1をみると、全体の6割以上は、母親学級・保健相談をうけている。うけなかった人の多くは、2人目、3人目を出産する人たちであり、初産の場合は78.1%が受講している。

次に、母親学級や個別指導をうけた人が、教えられたことを妊娠中にどの程度実行したのかをみると、表1-2のように、8割の産婦は「実行した」と言っている。

2) 実行したこと

教えられたことを「よく実行した」「まあ実行した」という人たちが、どんなことを実行したの

表1-1 妊娠中病院で、母親学級や保健相談をうけましたか

	全 体		病 院		助 産 所 等	
うけなかった	36.3%	392人	37.3%	347人	30.0%	45人
うけたことがある	62.3	673	63.4	570	68.7	103
無 回 答	1.4	15	1.4	13	1.3	2
計	100.0	1,080	100.0	930	100.0	150

表1-2 (「うけたことがある」人に) 母親学級や保健相談で教わったことを、妊娠中実行していましたか

	全 体		病 院		助 産 所 等	
よく実行した	14.6%	98人	13.0%	74人	23.3%	24人
まあ実行した	66.0	444	66.6	380	62.1	64
あまり実行しなかった	11.1	75	12.3	70	4.9	5
実行しなかった	0.4	3	0.5	3	—	—
そ の 他	3.3	22	3.9	22	—	—
無 回 答	4.6	31	3.7	21	9.7	10
計	100.0	673	100.0	570	100.0	103

表1-3 「よく実行した」「まあ実行した」人に) 実行したことを書いて下さい(複数回答, 上位のみ)

	全 体		病 院		助 産 所 等	
	%	人数	%	人数	%	人数
1 食事・栄養指導	47.0%	286人	53.6%	243人	48.9%	43人
2 安産体操	26.6	162	31.3	142	22.7	20
3 呼 吸 法	24.7	150	30.2	137	14.8	13
4 乳 房 手 入 れ	13.0	79	16.3	74	5.7	5
5 妊娠中の日常生活	7.1	43	7.1	32	12.5	11

かを自由に書いてもらった。この自由記述の内容を分類したのが表1-3である。

全体的にみると、半数近くの人が「食事・栄養指導」に関することを書いている。具体的には「献立、貧血防止、妊娠中毒症防止、減塩、減水、高血圧、カロリー計算、肥満防止」などがあがっている。「食事・栄養指導」は病院では主に栄養士が中心となって指導する項目といえよう。

2位以下については、「食事・栄養指導」ほど高率ではない。

施設別にみると、産婦が実行したこととしてあげる項目に特色がある。これはその施設ごとに力を入れて指導していることと、関係があるといえそう。次にいくつかの施設についてその特色をあげてみよう。

H病院 麻酔分娩を行なっているため、「呼吸法」や「安産体操」をあげる人は少なく、「食事・栄養指導」が7割を占めている。この中でも麻酔分娩との関係で10キロ以上の体重増加には注意しているとの病院の方針を反映して「体重を増やさないようにした」「カロリー制限」という表現が目立って多い。

G病院 ラマーズ法を導入しているため、「呼吸法」が58.8%と「食事・栄養指導」(64.7%)に次いで高い。

Q病院 食事・栄養指導が50.9%で最も多いが安産体操も41.8%と高率である。これは昭和39年から安産体操の指導を助産婦が熱心に続けてい

て、4回の母親学級の中に毎回安産体操の実技指導を入れていることの効果が表れたものだろう。

助産所等 病院全体に比べると助産所等では「妊娠中の日常生活」に関することがらをあげる率が高い。U助産所をみると、「適度な運動」「よく歩くこと」など、他の施設ではみられないことがらがあがっている。これはU助産所の助産婦が「妊婦時運動不足になりやすいので妊娠10か月頃に散歩して体を動かすことをすすめている」ことが反映されているといえそう。

また、助産所等では個別指導という形で指導が行なわれているが、この利点について、ある産婦は次のように述べている。

・大勢の相手の母親学級式ではなく、折にふれて個々人に対する度々の保健指導はとてわかりやすく、安心していられた(U助産所)

3) 実行しなかったこと

「あまり実行しなかった」「実行しなかった」と答えた人に実行しなかったことを自由に記述してもらった。結果は表1-4の通りである。

実行しなかった人たちは、必要がないと思ってしなかったわけではなく

・仕事に追われ、しなくてはいけない思いながらできなかった(E病院)

・後期は身体が思う様にならず呼吸法くらいし

表1-4 「あまり実行しなかった」「実行しなかった」人に) 実行しなかったことを書いて下さい(複数回答, 上位のみ)

	全 体		病 院		助 産 所 等	
1 安産体操	26.6%	27人	37.0%	27人	—	—
2 呼吸法	14.9	15	20.5	15	—	—
3 食事・栄養指導	14.9	15	20.5	15	—	—
4 乳房手入れ	13.9	14	19.2	14	—	—
5 妊娠中の日常生活	5.0	5	6.8	5	—	—

かやれなかった(C病院)
 ・前置胎盤のため、妊婦体操や乳頭の手入れなどできませんでした(Q病院)
 のような様々の理由から「できなかった」と言っている。

2 退院指導についての産婦の意見

1) 役立っているか

出産後に病院で行なわれる指導は、P24でもみるように様々あるが、それが家庭に戻って役立っているかどうかを尋ねた。

結果は表1-5の通りである。無回答が多いのは「入院中のため答えられない」(M病院)、「指導がない」(O病院, S母子健康センター)等の理由による。この中で「指導がない」という産婦が多いS母子健康センターの助産婦は、「指導については、大体の時間は決めてはあるが、助産婦

が1名のため診察とか相談に応じたりで決めた歯の時間がとれない。そこで(助産婦の)時間の空いているときや、産婦の休養時間を考えて適宜指導を行なっている」と言っており、これが産婦からみれば「きちんと決められた形での指導はない」と受けとめられているようだ。

これらの無回答者を除くと、ほとんどの産婦は「役立っている」「役立つことが多い」と言っている。

2) 役だっていること

表1-6をみるように、「役立っている」ことのトップは沐浴の仕方である。次いで授乳、調乳の仕方があがっており、上位は子どもに関する項目で占められている。

3) 役だっていないこと

入院中の指導が「役立たない」という数少ない産婦の記述をみると、現在病院で行なわれている指導についての意見が述べられているようだ。

表1-5 産後の生活について病院でいろいろな指導があったと思いますが、今自宅で生活に役立っていますか

	全 体		病 院		助 産 所 等	
役立っている	41.4%	448人	40.8%	379人	46.0%	69人
役立つことが多い	27.1	293	27.8	259	22.7	34
役立たないことが多い	1.1	11	1.2	11	—	—
役立たない	0.6	7	0.6	6	0.7	1
その他	0.6	6	0.6	6	—	—
無回答	29.2	315	28.9	269	30.7	46
計	100.0	1,080	100.0	930	100.0	150

表1-6 (「役立っている」「役立つことが多い」人に) 役立っていることを書いて下さい(複数回答, 上位のみ)

	全 体		病 院		助 産 所 等	
沐浴の仕方	42.5%	209人	42.7%	191人	40.0%	18人
授乳の方法, 調乳の方法	18.7	92	18.8	84	17.8	8
産婦の日常生活上の注意	14.8	73	15.7	70	6.7	3
赤ちゃんの育て方, 世話の仕方	13.6	67	13.6	61	13.3	6
全般	9.3	46	9.2	41	11.1	5
乳房の手入れ, マッサージ法						

表1-7 (「役立たないことが多い」「役立たない」人に) 役立たないことを書いて下さい(複数回答)

	全 体		病 院		助 産 所 等	
産婦の日常生活	14.2%	2人	14.2%	2人	—	—
沐 浴	7.1	1	7.1	1	—	—
乳房手入れ, マッサージ	7.1	1	7.1	1	—	—
そ の 他	71.4	10	71.4	10	—	—

・「役立たない」というわけではないが、赤ちゃんに乳を含ませる前に消毒綿でふくが、いくら衛生的といっても、消毒薬の含まれた綿でふくのは考えもの。私は熱いタオルでもむようにふく。きれいになるし、乳の出もよくなる(A

病院)

・「役立たない」というわけではなく、メーカーのパンフレットそのものと思う(D病院)
 ・今のところ母乳だけなので調乳指導が役立たない(L病院)

2 節 分娩時の看護と産婦の意識

1 産婦の意見

「上手に分娩させること」は看護職にとっての誇りであり、仕事に対する充実感につながるものである(P69)。

ここでは看護職が力を入れている「分娩」の場面で、産婦はお産に対して満足であったかどうか、不満があるとすればそれはどんな点であるかをみることで、分娩の際に産婦が必要としている援助をさぐっていく。

1) お産の仕方に対する満足度

今回のお産の仕方についての満足感を尋ねたが、結果をみると表1-8のように、全体の約半数は「とても満足だった」と答えている。

分娩の仕方との関係を見ると、図1-1のように、「自然のまま」で分娩した人の6割近くは「とても満足」と答えている。一方、「帝王切開」の場合は「とても満足」は3割にとどまっている。

病院と助産所等を比べると、助産所等は、「とても満足」が多く、「どちらともいえない」「不満が残った、つらかった」はほとんどない。特に2つの助産所では7割以上が「とても満足」と答えており、「不満が残った、つらかった」は全くなかった。このように助産所等で満足感が高いのは、「自然のまま」のお産が大部分を占めていること(P3)とも関係している。

2) お産の仕方に対する心残りや不満

今回のお産が「まあ満足」「どちらともいえない

I章 看護への産婦の評価と助産婦の意見

表1-8 今回のお産のしかたについて、あなたは満足できましたか

	全 体		病 院		助 産 所 等	
とても満足	49.5%	535人	46.6%	433人	68.0%	102人
まあ満足	31.3	338	32.8	305	22.0	33
どちらともいえない	7.3	75	7.7	72	4.7	7
不満が残った, つらかった	8.6	93	9.8	91	1.3	2
その他	0.3	3	0.3	3	—	—
無回答	3.0	32	2.8	26	4.0	6
計	100.0	1,080	100.0	930	100.0	150

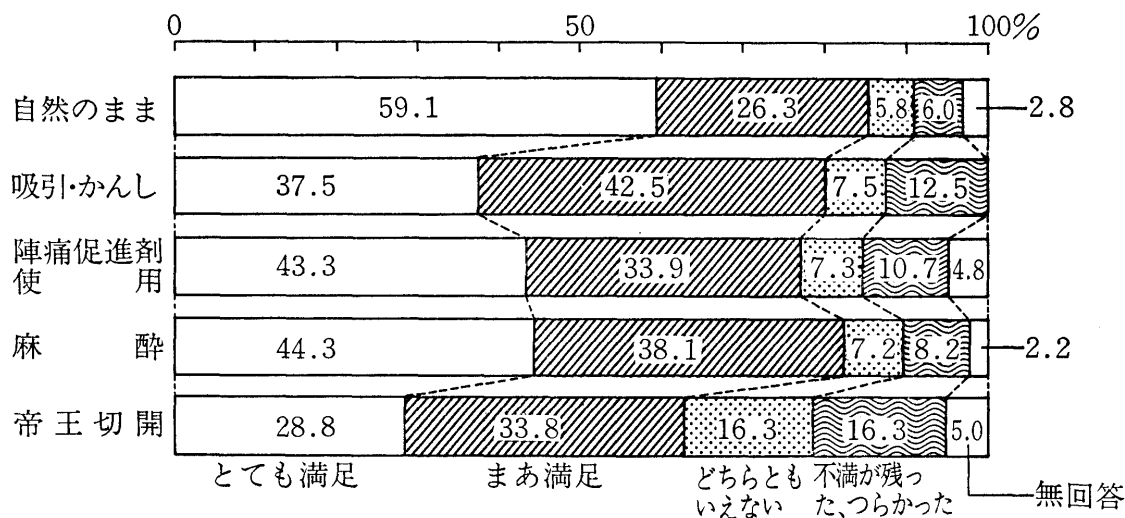


図1-1 お産の仕方別のお産に対する満足感

い」「不満が残った, つらかった」人にその理由を自由に記述してもらった。1) でみたように、助産所等では、「とても満足」がほとんどであるため、ここでは病院で出産した人たちが中心である。

結果を内容別に分類すると次のようになる(複数回答)。

- 1位 自分に対する反省(呼吸法, 安産 体操等の練習不足など) 17.5%
- 2位 病院の職員に対する不満(1人きりだったなど) 10.8
- 3位 自然に産みたかった 10.5
- 4位 陣痛のつらさ 8.8
- 5位 産後に体に支障がある(痛みがあるなど) 7.0

るなど)

これを見ると、お産に対して産婦が感じる心残りはその内容が多岐にわたっており、1つのことだけに特に集中する傾向はないといえよう。

では以下順にみていこう。

① 自分に対する反省

いちばん多いのがこの項目である。

まず、お産が楽でなかったのは呼吸法の練習不足や、安産体操をサボったなどの準備不足のためだと産婦自身がひたすら反省している記述がある。

・前회가初産の割には楽だったので2度目のお産ということで、油断をして体操も何もしなか

ったためか、つらかったのもっと準備をして
おけば良かった（D病院）

- ・呼吸法の練習不足のため、いざという時、腹式呼吸ができなかった（D病院）
- ・呼吸方法やいきみ方など、練習のとおりにはほとんどできなかった。練習が足りなかったのだろう（I病院）
- ・おそってくる自然のいきみが思いもよらぬものだったので、呼吸法が少しも間に合わずに終わってしまった（Q病院）

また母親学級を受講しなかった産婦は、分娩のときに上手にいきめなかったり、呼吸法を実行できなかった理由を母親学級不参加に求めている。

- ・3人目なので、母親学級を受けなかったため呼吸の仕方がへただった（D病院）
- ・母親学級にきちんと参加して正しいいきみ方、安産の仕方等の知識を得ておくべきだった（M病院）
- ・自然分娩が一番よいと思うので、その点については満足ですが、母親学級へ行かなかったので、陣痛をやわらげる呼吸法をうまくできずに、非常につらかった（J病院）

母親学級で習った通りには実行できなかったと感じたり、上手に分娩できなかったという判断を産婦が下す前に、看護職からの励ましやほめ言葉が一言あるだけでも、お産に対する印象は次のように、随分違って来るようだ。

- ・助産婦さんに100%よいお産をしたと言われそれまでの辛さがふっとんだ（L病院）
- ・最後に助産婦さんにほめられた事がうれしかった。“じょうずなお産でしたよ”“元気な男子

です”（L病院）

② 看護職に対する不満

2位にあがっている病院の職員に対する不満の中から、まず看護職に向けられたものをみよう。これは次のように、陣痛時や分娩時に看護職についてもらえずひとりきりにされたときの心細さを訴えたものが中心である。

- ・助産婦さんへ 分娩室において、妊婦を分娩台にひとりきりにさせないで、せめてひとりくらい横についていて下さい。とても心細い思いをしました（L病院）

ここで、調査対象の施設で陣痛から分娩にかけて、看護職が産婦にどれくらいついているのかをみてみよう。婦長からの回答によると、陣痛時は時間を決めた巡回をする場合が多いが、中にはI病院のように、「1時間に1回の見回りが原則ではあるが、分娩の進行状況や妊婦の精神的状態によっては、適宜行なう」という施設もある。

分娩中については、常に看護職がついている施設もあれば、同時に複数の出産が重なる場合などはつききりというわけにはいかないという施設もあった。看護職がついていない場合に何かあればナースコールを押すように指示するという施設が多いようだ。

このような看護職からの回答をみると、分娩時には時おり、また陣痛室では比較的長時間、妊婦がひとりきりになることは実際にあるといえよう。ある産婦は、そのときの状態を次のように述べている。

- ・分娩待機室で3時間近くほっておかれたことが不満（G病院）

I 章 看護への産婦の評価と助産婦の意見

そして「ほっておかれた」間に、本当はどんな援助がほしかったのかも述べられているが、これらは看護職に限らず、ともかく誰かがついていてほしいという記述と、看護職からの適切な指導をうけたかったという記述に分けられる。

まず「誰かがついていてほしい」というものは次の通りである。

- ・病院の規約で仕方がないとは思いますが…。陣痛の来る直前くらいは家庭の誰かがついていて腰などをさすってほしい (N病院)
- ・陣痛に対して不安をもっていた。付き添いをすべて帰され、看護婦さんも側にはおられず、1人で痛みをこらえるだけだった。付き添いの許可をもらえたらと思う (E病院)

次に「看護職からの指導をうけたかった」については次のような希望がでている。

- ・腹式呼吸、胸式呼吸についてきいていたが陣痛室にはいった時1人だったので、いつものようにしたらよいか、わからなかった。陣痛室には看護婦さんか助産婦さんをおいてほしい (M病院)
- ・ほとんどの方は親切にして下さったのですが、こちらが分娩室で不安な状態の時、適切なアドバイスが欲しかった (たとえば、陣痛について今どんな時期なのか、あとどれくらいなのか etc.) (H病院)
- ・陣痛が起きて、段々強くなっていくにつれて、練習していた呼吸法がバラバラになってしまふ様で不安でした。声をかけて指導して下さると、うまくできるようでした (K病院)
- ・陣痛室に居る間“陣痛は痛いものです、我慢して下さい”ばかりでなく、もう少し励ましの

言葉をかけて欲しい (D病院)

このような希望が出されている一方で、実際に看護職から援助を受け、そのことについて感謝の言葉を述べる産婦も多い。以下にそれを見ていく。

まず陣痛に際しては、次のようなものがある。

- ・陣痛の時、そばについていてくれて腰をさすってくれたのには、本当に感謝しました (G病院)
- ・助かった事…陣痛室で助産婦さんが“ハッハッハッ”と腹式呼吸を整えてくれたので集中して自信をもって出産に臨めました (L病院)
- ・陣痛が起きている時、ろうかを歩いて正しい呼吸のしかたを体をもって教えてくれたり手助けしてもらった事がとてもうれしかった (D病院)

また、看護職からのわかりやすい説明や話しかけで落ち着いたという人もいます。

- ・逆子で初産だったので、陣痛の時とても心細かったが助産婦さんが何時間くらいで産まれるとか、なぜ痛いのかとか、どうして我慢していなければいけないのかとか、分娩のしくみを説明してくれたので不安が減って上手に産もうという気持ちになれた (M病院)
- ・陣痛の時、看護婦さんがどうして痛いのか枕元でやさしく説明して励ましてくれた (I病院)
- ・破水して待機している時、助産婦さんがゆっくりと時間をかけて、いろいろな話をして下さったことがうれしかった (G病院)

そして出産に際しては、看護職からの心のこもった励ましの言葉で、頑張れたという人もいます。

- ・分娩の時、一緒になってかけ声をかけてくれ産ませて下さった助産婦さんの行動がほんとうにうれしく、またすばらしく思いました (D病院)
- ・助産婦さんはお産の時“もう少しよ”とかいきみがきた時“はいじょうずですよ”等と励まして下さり、本当に心強く思いました (G病院)
- ・出産時、助産婦さんが「頭が見えてますよ。髪の毛の濃い児ですよ。がんばって！」と励ましてくれた (D病院)

たとえつきっきりでなくとも、看護職は頻繁に見回ってくれるし、ナースコールですぐ来るのだということが、妊婦によく伝わっているだけでも、不安な気持は軽減されるようだ。

- ・陣痛時、何度も助産婦さんが見に来てくれて安心でした (G病院)
- ・陣痛で苦しんでいる時、呼び出しのボタンを押すとすぐに来てくれ、腰をさすってもらったことがうれしかった (K病院)

③ 医師への不満

医師について述べられた記述をみていこう。

これは医師の処置や態度に対する疑問とか不安感ともいうべきものが中心である。患者の立場からは、気軽に医師に質問することがしにくく、疑問が解消されぬままに残っているとさえそうだ。

まず、「医師の処置が遅いのでは…」という声がある。「異常が発生した時の医師の診療が遅れる」という看護職がいること (P17) からみても、

実際に「遅れがち」ということはあるのかもしれない。

- ・出産後すぐに傷のできた陰部の手当 (縫いあわせる) をすぐに受けられなかった、先生が来ていなかった (D病院)
- ・発露時に助産婦さんが先生を呼んでいるのが聞こえ、間に合うかどうかの時にやっと先生が来たように覚えています (L病院)
- ・手術の日より早く陣痛がおきてしまい、入院したのですが、先生や看護婦さんが早く手術してくださらず、2～3分毎の陣痛で、まちがえて生まれたら…ととても不安でした。昨年、帝王切開をしたものですから (G病院)
- ・明け方の出産のため、当直の先生が処置してくれたが、眠そうな顔で何もしゃべらずにしたため、非常に不安だった。また、お産の直後激痛があって訴えたのに結局2時間後に1回、それからもう1時間後にもう1回診察してもらってやっと原因がわかったのか痛みがおさまり、点滴もしてもらえたがそれまでの痛みと不安は信頼関係がなかったため、一層つらいものであった。もっと早く出血をくい止められなかったのか疑問が今でも残っている (F病院)
- ・予定日より16日も遅れて、ラミナリヤ、点滴などで、ようやく出産。羊水がにごっていて、もう少し遅かったら危険だったと言われた。それならばもう少し早く何らかの処置をしてほしかった。予定日よりだいぶ遅れて不安な日を過ごしたので… (G病院)

また、「医師が正常な経過の人に分娩誘発や処置をしすぎる」という看護職も多いが (P17)、産婦の中にも次のように述べる人がいる。

I 章 看護への産婦の評価と助産婦の意見

・医師が常に病院に滞在しておられないので不安だった。それで祭日にならないように薬で陣痛をおこし、出産した（O病院）

④ 病院の受け入れ体制についての不満

病院の受け入れ体制についての不満感を表明する人の記述もここに付け加えておこう。

これらの多くについては、病院側にしてみれば「たまたま」起こったことであるとか、「どうしても仕方がなくて」という理由があると思われる。しかし産婦にとっては、「自分の大切なお産」であり、「たまたま」という病院側の言い分は認めがたいといえよう。

・夜中に5分間隔の陣痛がおこり、病院に電話したが家で寝ているようにいわれ、病院に行っただころは、2分間隔の強い陣痛で事前の処置も思うようにできなかった（Q病院）

・分娩室に入り、音楽が流されて気持ちがほぐされたと思ったところ、ラジオ放送だったのでその後体験放送的なものが流れてきた。小児の心臓手術の放送で聞いていて涙が出てきたり、これから出産する児がこのような先天性の病気をもたないようにと願いつつ、分娩になりました。音楽だけのカセットだったら、もっと良かったと思いました（C病院）

・早産のため部屋がなく、婦人科へ入院したため連絡が届かないことがありました（E病院）

・分娩の際、待機室で待たされず、いきなり分娩室だったため、先に出産されている人の声等が非常に怖かった（H病院）

・ベッドがふさがっていたため、分娩室に2日間寝ていた。他人のお産が聞こえて眠れなかった（C病院）

⑤ 分娩の仕方についての心残り

これは分娩そのものに関する記述で、その内容によって次のように分けた。

ア. できれば自然分娩で産みたかった

イ. 麻酔分娩のため、産声がきけなかった

ウ. 麻酔がきかず苦しかったので、もっと楽に産みたかった

それでは各項目別に自由記述をみよう。

ア. できれば自然分娩で産みたかった

まず、産婦自身の身体や子どものために仕方がなかったとはいえ、自然に分娩できなかったことを残念に感じている人たちがいる。

・心臓弁膜症の合併症だったため、妊娠当初より鉗子分娩といわれていたが、できることなら、自然分娩で産みたかった（I病院）

・できれば自然に産みたかったが、前置胎盤のため、腹式帝王切開になった（J病院）

そして、「どうしても自然分娩ができない状態だったのだろうか」という疑問を示す人や、出産に積極的にかかわれなかったことに悔恨を残す人もいる。

・メスやハサミを入れるのに抵抗を感じました。がんばれば、なにも切らなくてもよかったのではないかとあとで思いました（D病院）

・設備が良いというだけで人工的にお産をするということに抵抗を感じる。時間（仕事を持っているので）さえあれば、自然分娩を希望（H病院）

・赤ちゃんを大きくしすぎたのかしら、そのために陣痛がこなかったのかと思いました。なんとか、自然に下から産まれなかったのかなとも思う（C病院）

これに対し、前回は自然分娩でなかったが、今回のお産は自然のままの分娩であったという人からは「とても満足した」という次のような声が寄せられている。これは前回に比べるとお産に積極的にかかわれた実感からくる満足感といえそう

・前回は帝王切開だったので、今回は産まれることの喜びを身を持って知った（D病院）

・最初の出産の時は、出産前に自分なりに呼吸法等の練習もして、自然に産みたい、と思っていたのが、会陰を切ったり点滴をしたりで病院の方針が意に反していたが、今回の出産では全て自然でその間の看護婦さん、助産婦さん、皆様の適切な指示・処置、とてもうれしく、苦しくはあったが、感激でした。又母乳を出すことにとても熱心で、いろいろ教えていただいたことも良かった（I病院）

イ．麻酔分娩のため、産声がきけなかった

これは麻酔分娩を実施しているH病院で多くみられる。ア．でみた産婦達とは違い、自然分娩への希望や医療側の処置に対する疑問はほとんどない。麻酔分娩に対してそれなりの評価をしており、肯定的な見方をしていると言えるだろう。しかし「出産の瞬間」を味わえなかったという心残りは多くの産婦から述べられている。

・痛みはそれ程感じられず、また、処置も徹底しているので安心ではあったが、うぶ声が聞けなかったのが心残りである（H病院）

・まったく出産時の記憶がないので、もう少し憶えていられればよかったと思っています（H病院）

・全身麻酔だったので出産の瞬間を覚えていなかったが、生まれた時の感じを味わいたかった（H病院）

ウ．麻酔がきかず苦しかったので、もっと楽に産みたかった

この記述も、麻酔分娩実施の病院に限られるが、イ．の場合と違い「麻酔がきかなかったこと」を問題にしている。これらの産婦は麻酔分娩に対して、全く痛みのない分娩であるといった期待を抱きすぎていたために、産みの苦しみが非常に大きく感じられたのではないだろうか。

ある看護職は、「母親学級では、“麻酔による無痛分娩とはいうものの、全く痛みがないわけではない”ことを妊婦に伝えてはいるが、医師は“夢を見ている間に終わるから”といった説明をしがちだ。妊婦はどうしても医師の話を信じてしまうようだ」と悩みを語っていた。

看護職が分娩に対する正確な知識を伝えようとしても、医師との関係や、分娩に臨む妊婦の態度が安易すぎるなど、問題は多いといえよう。

・この病院は麻酔分娩なのに残念ながらきかず、生まれるまでわかり、とても苦しかった。他の人に聞いたら麻酔がよくきいて痛む苦しみを知らずに産んだ人もいます。今思えば、もっと麻酔がきいてくれたら良かったと思います（H病院）

・陣痛がきたら早めに麻酔をかけてほしかった（H病院）

・手に持つ吸入麻酔が早くから手渡され、必要な時にはもう、残り少なくなっており、痛くてつらかった（H病院）

⑥ 産後に身体に支障がある

I 章 看護への産婦の評価と助産婦の意見

分娩そのものに対する不満というよりも、分娩に伴ってできた傷や、縫合のときの痛みによって今回のお産に不満を残す人もいます。そしてこれらの記述からは、どうして痛いのか、心配すべき痛みなのか、あるいはなぜ切開しなければならなかったのか等を知らされていないため、不安になり、産婦なりにいろいろな理由を考えて納得しようとしている様子もうかがわれる。

- ・タイミングが合わなかったのか、会陰切開をしなかったので大きく切れてしまって痔の痛みも加わって、つらかったこと（Q病院）
- ・子供の小さい割にやはりそれでも傷ができるので傷の痛みがかなり苦痛だった（K病院）
- ・予定日よりだいぶ遅れて、子供が大きくなりすぎたためか、お産の時にキズができた（Q病院）
- ・分娩の最後に急にいきみすぎたのか、1人腹の上に乗って出したためか、出口がだいぶ切れたみたい（M病院）
- ・お産の時に切るのは無理のないことですが、抜糸しなくても良いようなわけにはいかないでしょうか。抜糸するまでのつらさはお産の時より大変でした（D病院）
- ・分娩後、傷口がきつく縫い合わせてあったので、つれてまともに歩くことができなかった。退院後も2、3日その状態が続いた（H病院）

2 助産婦の意見

分娩をめぐる看護として、分娩室に入った産婦に必ず職員が付くとか、付かない場合の対策はどうしているか。そして、分娩をめぐる医師との間に起こるトラブルと、分娩についての看護職側の不安とをとりあげる。

1) 分娩室での職員の付添い

問 あなたの施設では、正常な経過の産婦が分娩室に入ってから出産終了までの間、職員がそばに居ますか

1位	必ずついている	525人	51.5%
2位	つかないこともある	454	44.5
3位	誰もつかないことがかなり多い	32	3.1
	無回答	9	0.9

同じ施設の中でも、「必ずつく」という助産婦も「つかないこともある」という助産婦もいる。従ってこの回答には助産婦1人1人の仕事のしかたが現われていると思われる。

ちなみに分娩室に移す時期を、全国21の施設の例でみると「初産婦は排臨直前、経産婦は全開大になったら」移すという方針の施設が多いようである。早めに移す施設では、「初産婦で子宮口4横指開大、経産婦で3横指開大」で、という所があり、逆に、初産婦も経産婦も排臨ギリギリで分娩室に移すところもある。

分娩室に移した産婦のそばから職員が離れることと、産婦が1人になるときの対策は関係がありそうだ。

2) 産婦が1人になるときの対策

問 では、分娩中、産婦が1人になる時の対策はどうしていますか

1位	ナースコールのみ	314人	30.8%
2位	分娩監視装置	287	28.1
3位	家族の同室を認める	140	13.7
4位	その他の対策	98	9.6
5位	特に対策はない	12	1.2
	無回答	169	16.6

「特に対策はない」という人のほとんどは、分娩室に入った産婦には「必ず職員がついて」安全

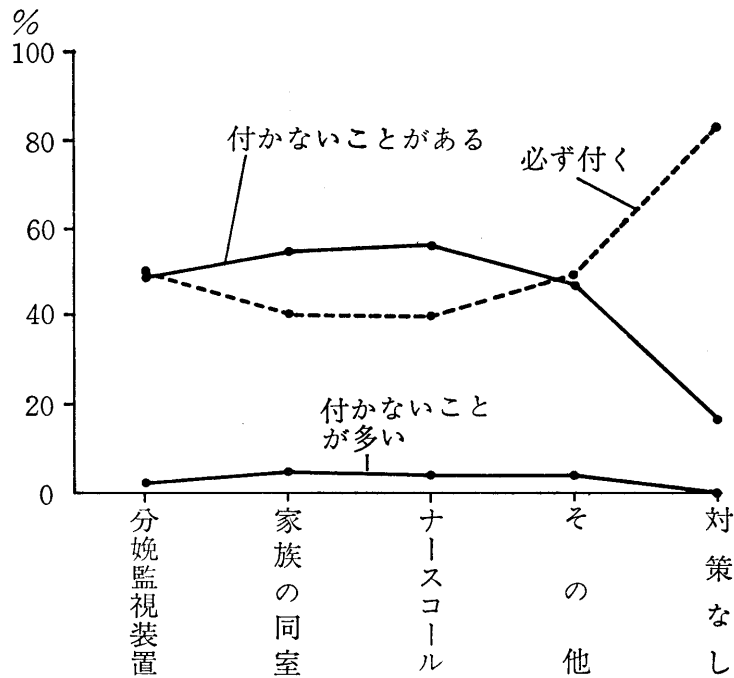


図1-2 お産中ひとりのときの対策別の看護職の付添い方

を確保すると答えている。逆に「家族の同室を認める」とか「ナースコールのみ」という人は、職員が産婦のそばに「付かないこともある」とか、「付かないことが多い」と答えることが多い。

このように、家族を入れるとか、ナースコールや分娩監視装置を使うなどの対策を講じると、助産婦は産婦のそばから遠のくという傾向がうかがえる(図1-2)。

助産婦としては、十分対策を講じてあるから、そばを離れるという安心感もあるのだろうが、この安心感が産婦に十分伝わっていない場合に、産婦に、1人ぼっちにされたという不安とみじめな印象だけ与えてしまうことはすでに見た(P10参照)。

3) 分娩をめぐる医師とのトラブル

「正常分娩はすべて、助産婦が責任をもってやれるし、いざという時は医師がいつもいるから安心。医師は特別の時以外は助産婦の看護計画に口

出ししない。」

このように助産婦と医師との間のスムーズな関係をのべる人はそう多くはないようである。

問 最近3か月くらいの間、医師との間で次のようなことがありましたか(1つ1つの問いについてすべて回答)

1位	医師が正常な経過の人に分娩誘発や処置をしすぎる	389人	38.1%
2位	異常が発生した場合の診療がおくれる	173	17.0
3位	会陰切開、人工破膜の時期や、誰が行なうかで、医師と助産婦の判断が一致しない	170	16.7
3位	医学研究用の業務を助産婦に相談なく取り入れる	170	16.7

I章 看護への産婦の評価と助産婦の意見

5位	医師が正常分娩の介助を 助産婦にまかせない	127	12.5
6位	その他	81	7.9
	何もない	233	22.8
	無回答	173	17.0

約6割の助産婦は、医師との間にトラブルを感じている。トラブルの内容をみると、いっしょに仕事をする助産婦からみて、医師に「処置しすぎ」があり、あるいは「手遅れ」があることを推測させる結果がでていいる。

「医師が正常な経過の人に分娩誘発や処置をしすぎる」という意見をもつ人が多い施設では、実際に誘発剤、促進剤を使うことが多いだろうか。17病院についてみていこう。

図1-3をみると、陣痛誘発剤を多用している施設ほどそのことに批判的な看護職が多いわけではないようだ。誘発剤の使用が少なくとも、それに批判的な看護職が多い施設もある。逆に誘発剤を多用していても、慣れているせいか批判的な看護職が少ない施設もみられる。この問題は、「自然な分娩経過」についての看護職1人1人の問題意識や、看護チームがもっている雰囲気によるところが大きいのだろう。ただ、誘発剤を5割くらいの産婦に使用している施設では、看護職の批判が特に高い。これは、誘発剤の使用が増えていく途上での看護職の抵抗感が現われているのではないだろうか。

以上のような、医師のやり方に対する助産婦の批判は、医師に伝わり、そして医師に聞きいれられているのだろうか。

問 (医師との間でトラブルがおきた時)
多くの場合はどうなりがちですか
1位 看護側の意見を伝えるが、 377人 61.8%

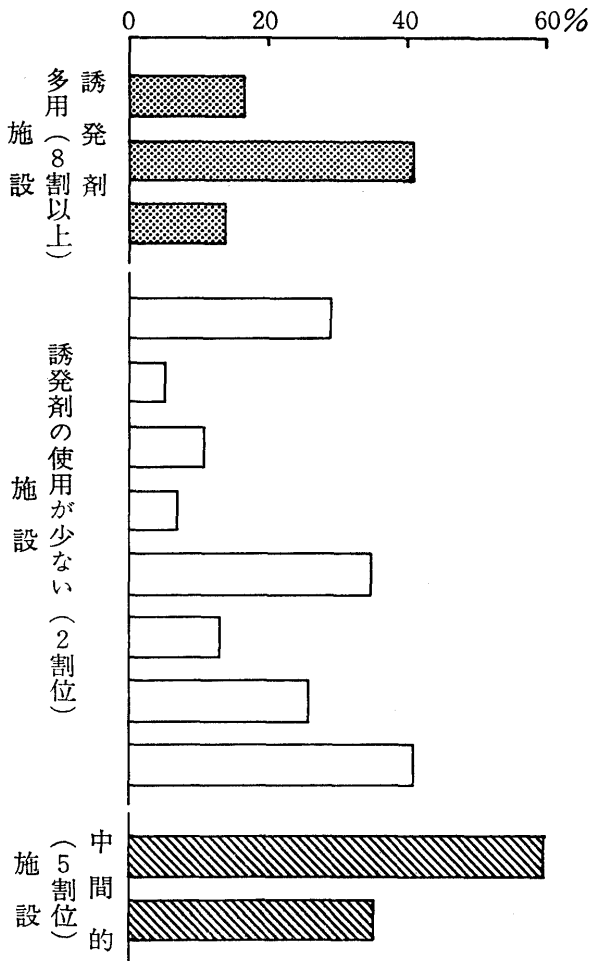


図1-3 分娩誘発等に批判的意見と実際の使用状況

2位	医師の意見が通ることが多い いわれた通り医師の意見に従うことが多い	209	34.3
3位	看護側の意見が通ることが多い	24	3.9
計		610	100.0

看護側の意見を言っても聞きいれられず、何も言わずに従うだけ、という人も少なくない。

この他、自由記入には次のような医師との間の

トラブルが書かれていた。

- ・入院の時期について。医師の強制のため外来を訪れすぐ入院させ、その日のうちに誘発分娩及び帝王切となっていること。」

・妊産婦と医師の関係の改善、医師が強圧的である。

- ・夜間、医師は出勤せずに助産婦にすべて（縫合も）まかせてしまうが、昼間は医師自身が切開して会陰縫合することが多い。

3 節 入 院 生 活

1 入院中の困ったことやとまどいの有無

ある産婦は、

- ・病院側にとっては手慣れた日常的な仕事の1つに過ぎないとしても、産婦にとって、特に初めての出産は不安だらけの重大事である（G病院）

と述べているが、確かに分娩とそれに続く入院生活は、産婦の目からみれば、とまどいや驚きの連続と言える。看護職が産婦の声に耳を傾け、産婦の視点から入院生活を改めて見てみると、入院という特殊性やそこで生活することの大へんさに気付くことになるだろう。

表1-9のように、半数以上の産婦は入院中に困ったりとまどったことは「特にない」と答えている。

施設別にみると助産所等はとまどいが「特にない」が7割をこえているのに対し、病院の中には「とまどいがあった」が6割あるいは7割をこえているところがいくつかある。

このような差が出てきた理由として、助産所等は病院よりも産婦の日常生活に近い生活が送れるということ、つまり産婦は病院での生活ほどには緊張せずに過ごせるということが考えられよう。

2 困ったことやとまどいの内容

次に「とまどいがあった」という産婦に、それはどんな点だったのか項目をあげてきた結果は表1-10の通りである。

それぞれの項目についてみていこう。

1) 赤ちゃんについて

全体的にみると、「母子同室」の病院では「異室」の病院に比べて赤ちゃんについての心配が図1-4のように高くなっている。常に子どもと一緒にあれば、気になることも多くなるのであろう

表1-9 入院している間に、あなたは困ったりとまどったことがありましたか

	全 体		病 院		助 産 所 等	
特にない	53.5%	578人	49.9%	464人	76.0%	114人
何かあった	42.9	463	46.3	431	21.3	32
無 回 答	3.6	39	3.8	35	2.7	4
計	100.0	1,080	100.0	930	100.0	150

表 1-10 入院中の困ったことやとまどいの内容（複数回答）

	全 体		病 院		助 産 所 等	
赤ちゃんについて	55.7%	258人	55.2%	238人	62.5%	20人
あなたの体の具合について	51.6	239	52.7	227	37.5	12
入院中の日課について	32.0	148	34.1	147	3.1	1
その他のことについて	14.0	65	14.4	62	9.4	3

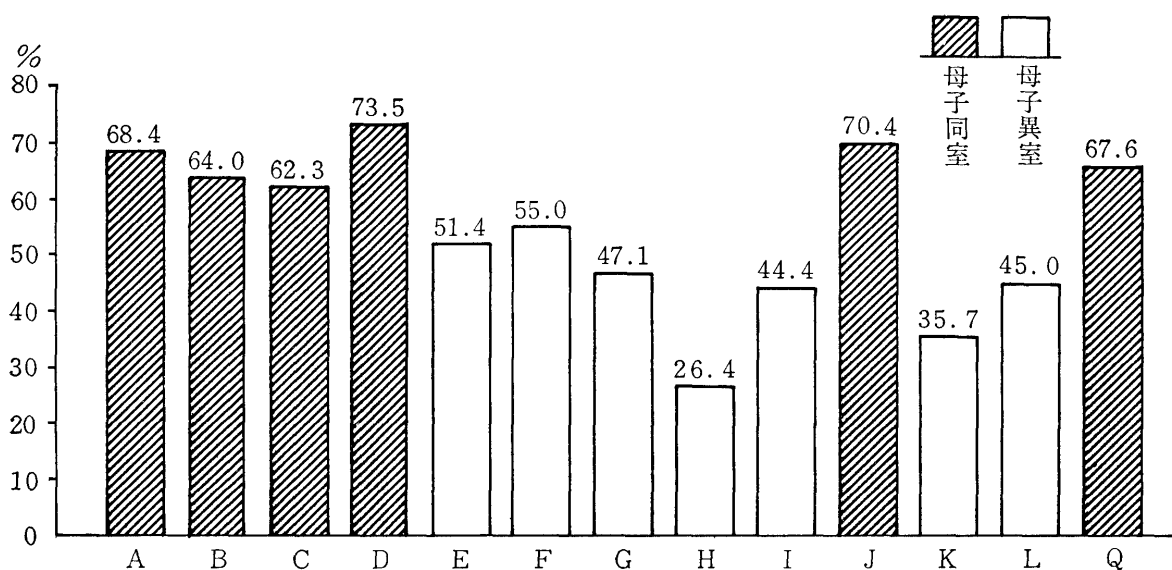


図 1-4 病院別「赤ちゃんについてのとまどい」ありの率

う。

どんな点が気になっているのか自由に記述してもらったが、これを内容により分類し、多い順に示すと以下ようになる。

- 1位 赤ちゃんの母乳の飲み方 104人 40.3%
- 2位 母乳が出ない、うまく授乳できない 47 18.2
- 3位 夜泣き、泣きすぎ、泣かない 36 14.0

では次に自由記述をみていこう。

① 母乳の飲み方

2位の母乳が出ないという記述は、次の2)「産

婦の体についての心配」においてまとめてとりあげることにし、ここでは「赤ちゃんの母乳の飲み方」についてのとまどいをみていく。

・お産から3日間ほど、他の赤ちゃんに比べお乳の吸いができず、ほとんど授乳できなかったこと（A病院）

このように、飲む量が他の子どもに比べて少ない、吸いつきが下手だなどの心配を書く産婦は多い。

子どもが吐いたり、よく吸わなかったりすると、母親は栄養不足になるのではないかと、どれだけ飲ませたらよいのか、と心配で次のように落ち

つかない気持になっている。

・2回くらい赤ちゃんが吐いたので、どうしたら良いのかとまどった。ゲップをださなかったので、赤ちゃんがお腹が張り夜眠れないで苦しんでいました。それから、どのくらい飲ませたら良いか、神経質になり困っています（C病院）

・乳首が小さいのでなかなか吸いついてくれなかった。特に左側は苦労している。母乳を飲ませる時間が決まっているので、途中で一休みする我が子に苦労した（L病院）

・乳首が悪いため赤ちゃんに吸いついてもらえず、栄養分がいかないのでは…と心配した（E病院）

・母乳を飲ませてもむずかってなかなか吸いついてくれないので、とつてもとまどい、私の精神も落ち着かない状態だった（A病院）

② 泣くこと

「夜泣きや、泣きすぎること」あるいは反対に、

・1日中泣かなかった時（D病院）

のように「泣かないこと」について、「どうしてよいかわからなかった」と、その「手のつけられなさ」を訴える記述が多い。

・お部屋に戻ってきた夜、泣かれて、どうしたらいいかと自分でも泣きたくなくなってしまった（D病院）

・夜の2時から朝の6時頃まで起きていて、ベッドに寝かすと泣くので、その時はどうすればよいかわからなかった（J病院）

・おむつを替えても、オッパイをあげても何をしても泣きやまずに真赤な顔をして泣き続けられたこと（C病院）

・黄だんで入院したせいかどうか、他の赤ちゃんと比べて泣かない。眠ってばかりで不安だった（D病院）

さて、「母乳の飲み方」や「泣くこと」のように子どもに対するとまどいや不安が大きいだけに、次のように看護職がもう少し気を配ってほしかったと述べる人もいます。

・消灯後赤ちゃんを預けますが、大泣きに泣いていつまでも泣きやまない声があるので行ってみると、便をしていた。ちょっと看護婦さんが見てくれて、替えて下さると嬉しかったのですが…。そんな人ばかりではありませんが、またお忙しいでしょうが、1時すぎは預けていただけるシステムになっているのですから、赤ちゃん担当の方が1人いらっしやると大変心強いのですが…（N病院）

また、未熟児のために我が子と離ればなれになった産婦はそのときの不安な気持ちを次のように述べている。看護職はこのような産婦の気持ちを理解し、乳児の様子を伝えるなど、力づける必要がある。

・未熟児センターに子どもが行ってしまったこと。やさしくしてもらったけど子どものことを看護婦さんに聞きにくかった（E病院）

・低体重の為、未熟児センターへ連れていかれお乳が張ってきたのに含ませることができなくてもどかしかった（E病院）

・未熟児の上、生まれてすぐ手術をして小児外

I 章 看護への産婦の評価と助産婦の意見

科に入院したので様子がよくわからなく不安になる。さみしい (M病院)

一方では、次のように子どもに注意をむける看護職の存在に、安心した産婦も多い。

・乳児の世話をしてくださる看護婦さんが、1人1人の赤ん坊のことをよくみて下さり、子どもの特徴を覚えてくれ、とてもうれしく安心感ももてた (F病院)

・色々な面で看護がよく行きわたっていた。赤ちゃんの事は特に顔に何かできるとすぐに薬をつけてくださったり、よくお世話していただいた事 (H病院)

・出産時、すぐに赤ちゃんを見せて下さり、沐浴後、そばに連れて来て下さった事 (G病院)

2) あなたの体の具合について

赤ちゃんに対するとまどいや心配に次いで産婦自身の体の具合についてのとまどいが多い。自由記述の内容を分類し、多い順にみると以下のようなになる。

1位	傷口が痛む, 出血, おりもの	49人	20.5%
2位	乳房が張る, 痛い	39	16.3
3位	母乳の出が悪い	31	13.0
4位	痔, 便秘	24	10.0

① 傷口の痛み

ここでは、1位と4位をまとめてみていく。

- ・傷口が痛くて便をするのがつらかったり、坐るのがつらかった (H病院)
- ・傷が痛くてベッドからおりるのが大変でした

(しかたがないことかもしれませんが) (Q病院)

・おしりが非常に痛くて、子どもを24時間しか預かってもらえないので、その後は自分で世話をしなければならず、抱き上げるにも痛みがひどくてままならず、非常に苦しかった (J病院)

そして、看護職に対しては、このような状態であることを理解した上で対応してほしいとか、あるいは自分の体がどんな状態であるのかをきちんと教えてほしいとも言っている。

・出血が多かったため、立つのもフラフラする状態の産後12時間ちょっとで歩くように言われ、トイレに行き失神してしまった。またはっきりと体の状況について知らされなかったこと (F病院)

・分娩後6時間後に歩行開始と同時に、パット交換をしたが、出血量におどろいたし、看護婦が立ち合わないのが不安だった (M病院)

・1回目の出産後、便秘のため切痔を起こしてしまい、今回も出産後、再発してしまった。妊娠、出産に伴う起こりやすい病気についても指導してほしいと思った (I病院)

② 乳房に関すること

2位と3位および1)「赤ちゃんについて」の心配の中であがっていたものをあわせてみていく。

まず乳房緊満の痛みとかつらさ、それに伴う不安な気持ちが述べられている。

・乳が張り、子どもが吸ってくれる時、力がないため思うように出ず、いつも張った状態で痛

いのが気になります（B病院）

・前回、乳腺炎にかかったため、なかなかお乳がやわらかくならず、張って熱くなったりして心配だった（E病院）

・母乳が良いので、とにかく出るようにと思いましたが、乳腺がなかなか開かなくて、夜とても痛かった（H病院）

・乳房がしばってもしばってもすぐ張ってくるので疲れる。痛くて横になれない（M病院）

このように張ってしまった状態のときに、看護職の援助がほしかったという人もいます。

・初めてでわからないことが多いのに、行きとどいた指導がなかった。特に乳が張ってきた時に、マッサージの仕方など教えてもらえなかった（H病院）

・お乳が張り、固くなり、とても痛くてマッサージを頼んでも忙しくて忘れたのかやってもらえず、つらかった（G病院）

・おっぱいが張ってしばってほしかったが、みんな忙しそうでもらえなかった（C病院）

一方、乳房マッサージをしてもらったという産婦は感謝の言葉を述べており、その数は非常に多い。代表的なものをみよう。

・乳房マッサージは3日間となっていたのですが、私は張りがひどく、痛がっていたら飲みの良い赤ちゃんを連れてきて下さったり、夜中でもマッサージして下さったり、ベテラン看護婦さんのマッサージによってだいぶ救われたとうれしく思っています（D病院）

・産後2日目お乳が張り、大変苦痛な思いをし

たが親切な助産婦が丁寧にマッサージをしてくれて古いお乳をしぼり、乳腺を開いてくれて、すっかり楽になりました。大変やさしく親切な方でした（L病院）

病院によっては、乳房緊満について書く人がほとんどいない病院もある。たとえばL病院では「生後2時間で乳房管理を開始することになっている」とその理由をあげている。I病院でも母乳緊満に対する訴えがないが、ここで具体的に、この病院ではどのような指導方針をとっているかを婦長に対するアンケートの回答によって見よう。

①授乳 原則として3時間授乳で、夜間（23時、3時）の授乳は母体の疲労、母乳の分泌状況により考慮している。

②授乳指導 初・経産婦共に24時間前後とし、初回授乳は助産婦が指導についていくことのできる時間帯（10時または13時）としている。

③乳房管理 ア. 授乳指導時に乳房チェック用紙により、その状態および前回授乳状況等を調べ、その後の指導の参考にしている。イ. 各勤務帯において少なくとも1回は授乳室へ行き、哺乳量、母乳の与え方、児の吸吮等をチェックし指導する。ウ. 申し送りには適時カンファレンスを行ない、母乳確立への援助を行なっている。エ. マッサージは必要により適宜行なう。

以上のような指導方針がたてられているI病院では、マッサージに対する感謝の言葉が多いが、そのときの助産婦からの励ましの言葉にも力づけられているようだ。

・お乳が張って痛かった時、もんで下さってあ

I 章 看護への産婦の評価と助産婦の意見

まり出なかったお乳が出るようになって、母乳だけでがんばるように言われた時、非常にうれしかった（I病院）

また、I病院ではマッサージや授乳時間等が産婦の必要に応じて行なわれているが、このような方針は、産婦にとってうれしいことであるようだ。

- ・授乳室に行けない間、新生児室から病室まで赤ちゃんを連れてきてくれて、ていねいに授乳指導をしてもらった（I病院）

次に、母乳が出ないことでとまどっている産婦の記述をまとめてみる。

ほとんどの施設が母乳哺育を目標としてすすめているだけに、母乳が出ない産婦の悩みは深刻である。

まず「我が子に悪い」という次のような感想をもつ人がいる。

- ・母乳の出が悪く、赤ちゃんにすまない気がした（B病院）

また、次のように産婦自身がひどく追いつめられた気持になったり、疲れはててしまう場合もある。

- ・母乳があまり良く出なかったので、ノイローゼ気味になった（C病院）

- ・母乳があまり出ないのに出しなさい、出しなさいと言われ、ミルクの量を減らされたりして、熱が出てしまった（J病院）

- ・お乳の出が悪くて授乳に時間がかかり、赤ちゃんも、自分自身もくたくたの毎日でした（D

病院）

そこで、母乳が出にくい産婦がいる場合にそれぞれの施設でどうしているかをみると、「全員母乳、ミルクは認めない」という病院もあれば「医師の指示によって、ミルクを与える」という病院まで様々ある。産婦の中には、補助のミルクについて次のように述べる人もいる。

- ・母乳の出が悪く、自分としてはミルクを足して欲しいと思ったが、仲々言いだしにくかった（G病院）

- ・母乳が足りなかったが、ミルクでなく糖水が多かった。私はミルクがほしかった（A病院）

このような記述は必ずしも「全員母乳、ミルクは認めない」という病院からでているわけではない。母乳主義の病院であっても産婦から上のような不満はなく、感謝の言葉が述べられるところもある。

- ・安易にミルクを与えないで母乳を第一に考えて下さるので、今とても満足と自信ができました（L病院）

一概には言えないが、看護職の指導の仕方次第で母乳で育てることに対する産婦の印象も変わるようだ。ある産婦は、看護職からの励ましで母乳が出るようになったうれしさを次のように述べている。

- ・5日目になってやっとお乳がでるようになったが、それまでの間、「必ずお乳は出るようになる」と励ましてくれたことが一番うれしかった（D病院）

そして一方では、看護職からの対応によって、次のようにつらい気持ちになる産婦もいる。

- ・お乳が出ないので1度いただいたミルクをもう1度もらいに行くと、とても不機嫌な感じで“おっぱいが出ないんですか”と言われてたりした。赤ちゃんにお乳をあげたいのは誰も同じだと思います。母親がいちばん必然性を感じていることなので、この言葉はとてもつらかった (J病院)

3) 入院中の日課についてのとまどい

入院中の日課についてのとまどいを書いている人はそれほど多くはないが、そのほとんどは病院で出産した人たちであり、助産所等の産婦は4施設を合わせて1人にすぎない。このことからも病

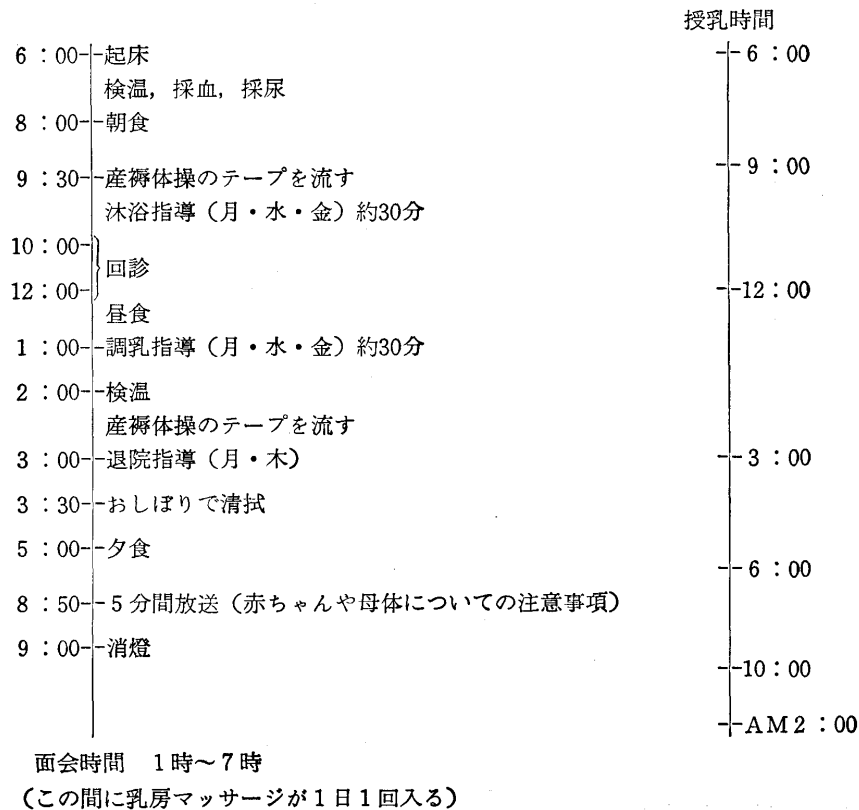
院での生活が、助産所等での生活よりも産婦の日常生活からかけ離れていたり、スケジュール的に無理があると言えるようだ。

自由記述を内容によって分類すると次のようになる。

1位	忙しすぎる	29人	19.6%
2位	授乳時間に従うのが大へん	27	18.2
3位	疲れる、休養がとれない	26	17.6
4位	赤ちゃんの生活時間に合わない	15	10.1
5位	夕食が早すぎる	9	6.1

まず病院での産後の日課を概観してから、産婦の自由記述に入っていこう。

表1-11 産後の日課



I章 看護への産婦の評価と助産婦の意見

表1-11の日課はある病院のものであるが、他の病院についても大同小異である。

これをみると、早朝の検温から消燈までの間に各種の指導が組まれており、3時間あるいは4時間間隔で授乳時間が決められている場合は、消燈後も産婦は何度か起きなければならない。全般に産婦の日課はコマ切れであり、30分以上休憩することは、なかなか容易でないことがわかる。

また食事時間であるが、表1-11の病院では夕食は5時からだが、4時や4時半から始まる病院もあり、6時頃からの夕食というところは、減多にない。

病院でこのような生活をこなしてきた産婦の自由記述をみよう。

① 忙しい、疲れる

ここでは、日課が盛り沢山であるため「忙しい」という記述と「疲れる」という記述とを合わせてみていこう。

看護職は退院してからも育児や生活のことで産婦が困らないように、産後の指導を充実させたいという気持が強い。看護職の中には「現在産褥5日間の入院であるが、これでは短期間で退院指導が十分できてないと思うので、入院期間を長くしたい」という人もいるが、産婦側は、次のように現在の日課の忙しさも短期間のことだと思って懸命に耐えているというのが実情のようだ。

・割合にハードだと思ったが、家に帰ればそれ以上になるので、病院にいる時から慣れている方がいいのかもしれない、となくさめていた (M病院)

・体があまりに疲れてしまって時間についていけなくなって困った (C病院)

・午後になれば、少し時間的に余裕ができるが、午前中は30分刻みのスケジュールで毎日が

とてもあわただしかった (J病院)

・朝早くから検温に始まり、ベッド清掃、授乳、食事、面会、回診等々で忙しくてゆっくり休めない。夜、なかなか寝られない時は特につらかった (G病院)

・便秘気味になりました。他の母親たちも寝不足で身体がもたないという事でした。もう少し身体が楽にできるように考慮してもらいたい (J病院)

また指導項目が多かったり、指導の時間が長いことによって疲れるという人や、肝心の赤ちゃんの世話さえできないという人もいます。

・指導や診察等で忙しくて、赤ちゃんのことが良くみられない。初めての母親には特にきつい (D病院)

・赤ちゃんが母親の元に帰ってきて忙しく、慣れないで、何分疲れぎみのところに調乳指導、退院指導 etc, いろいろありすぎる。もっと後方の日に願いたい (D病院)

・赤ちゃんが産まれてからは赤ちゃんの世話だけでも大変なので、家族計画の指導とか産まれる前でもできることは、なるべく産まれる前に行なってほしい (C病院)

・講習時間の長い場合 (1時間以上) 縫合のあとが痛くて坐っているのもつらかったり、お乳が張って痛くなってしまう人もいました (D病院)

母子同室の産婦は、赤ちゃんについてのとまどいが多いが (P18)、同室のためと日課のハードさとのために、安眠できない、疲れるという声もある。

・産後せめて8時間くらいは静かな病院でゆっくり休みたいと思った。夜間、赤ん坊の泣き声や母親の話し声等、耳につき、産後の興奮さめやらぬところに安眠できない様に思う（Q病院）

・子どもと、次の日から一緒だったので睡眠不足で、とても辛かった（2、3時間しか眠れなかった）（J病院）

・病院によっては、夜、新生児室で赤ちゃんを預かってくれる所もあるそうですが、J病院は親の側に1日中置いておきます。寝不足と疲れで退院する頃は、ヘトヘトになります（J病院）

② 授乳時間に従うのが負担になる

授乳が開始されてからの、あわただしさを述べる産婦が多いので、ここでまとめてみていくことにしよう。

まず、授乳時間が決められているため、夜中でも起きなければならないときの、身体的つらさが述べられている。

・母親として母乳をあげるのはあたり前ですけど、時間的にあげることが最初だけにつらかった（C病院）

・夜、2日目から夜の11時、3時の授乳のため眠れなかった。夜3時の授乳は病院の時からいんたんとか考えてほしいと思った（I病院）

・身体の調子が戻らないうちから、夜中まで9:00, 0:00, 3:00, 6:00に起きて授乳するのはとても疲れました。入院中、身体がとても疲れ忙しかった（N病院）

このような、夜中に起きなければならないということばかりでなく、3時間あるいは4時間おき

とはいっても、授乳に慣れていなかったり、子どもが飲まない、母乳が出ない等のいろいろな理由から、どうしても時間がかかってしまい、次の授乳時間までゆっくり寝てられないこともある。眠れないつらさは次のように訴えられている。

・最初の頃、母乳が出なかったので、授乳に時間がかかり一晩を通して2時間くらいの睡眠の日が3日間くらいあった。育児ノイローゼになる母親の気持ちが少しわかった（C病院）

その他の産婦からも次のような声があがっている。

・3時間おきにミルクを与えるのは良いのですが、赤ちゃんがなかなか飲んでくれない場合にある程度の量は飲ませなくてはいけないし、時間も長びいてしまうと次に飲ませる時間になってしまう（C病院）

・当然とは思いますが、授乳時間がすぐ来るとい感じで授乳後も乳をしぼって出したりすると、睡眠時間が少なく身体がとてもつらかったです（E病院）

・3時間ごとに授乳したのだが、授乳に1時間もかかって睡眠が十分とれなかった（C病院）

以上のように疲労困ぱいした状態のときに看護職からの援助があったという産婦は、次のように述べている。

・出産後4日目の晩、赤ちゃんが仲々寝つかずとうとう夜12時を過ぎてしまった時、看護婦さんが赤ちゃんを預って下さり“ゆっくりお休み下さい”とおっしゃって下さった時は本当にありがたいと思いました。お陰様で朝4時の授乳

I章 看護への産婦の評価と助産婦の意見

までグッスリ眠ることができました。家に帰ったら望めないことでもあるし、大変にうれしい一晩でした（C病院）

・分娩後、母親の体を気づかい、夜赤ちゃんが寝ないと新生児室で面倒をみてくれましたので、疲れがとれました（Q病院）

③ 赤ちゃんの生活時間に合わない

授乳時間が決められていることは、産婦の疲労につながるが、赤ちゃんに対してもよいことなのかという疑問も出されている。

・3時間くらいの間隔で授乳して下さいと言われてたが、赤ちゃんはスヤスヤ眠ってばかりなので、無理矢理起こして授乳しましたが、あまり飲まずに眠ってしまい、かわいそうでした（Q病院）

・時間を決められた授乳のため、眠っている子に無理矢理飲ませなければならなかったこと（I病院）

・時間で授乳のため眠っていてもお乳をあげなければならなかったり、お腹がすいていてもあげられなかったりしたこと（M病院）

そして、次のように、看護職の対応の仕方について、かなりはっきりと意見を述べる人もいる。

・3時間おきの授乳はどうかと思う。母乳を与えるとすれば、赤ちゃんの要求にあわせて吸わせるのが本当だと思う。“無理に起こしてでも飲ませなさい”式で、授乳におわれ、結局その場しのぎにミルクを足す結果にもなった。母乳があまりよく出なかったもので…。看護婦さんにも追いたてられ、気が休まらなかった（C病院）

④ 日課の変更で予定がたてられない

ここでは、「予定変更の際は事前に連絡してほしい」という声を取りあげる。急に日課が変わったり、スケジュールが前もって知らされていないとすれば、産婦の「入院生活中のあわただしい感じ」はますます高まるだろう。

ある病院で、この辺の事情をきいたところ、変更になることは滅多にないとのことであったが、産婦にしてみれば「急に」変更になることに変わりはないといえる。

自由記述をみよう。

・予定表に書いてある時間通りに事が運ばないため、時間に追われたり、授乳の時間が遅れたりしてしまい困った。病院側も時間を守ってほしい（L病院）

・赤ちゃんの入浴や検診の時間がはっきり定まっていなかったりするので、授乳のタイミングに困った（A病院）

・回診時間を始めとして日によって時間があまりに違うので予定を立てて行動できず、落ち着かなかった（Q病院）

・日により授乳時間が早くなる事があり、それが不規則なので困った（F病院）

・回診準備をしてから回診が始まるまで、長く待たされることが時々ある（K病院）

また各病院の産婦に渡す日課表をみると、非常に見にくく、見間違いやすい体裁である場合もあった。やはり、産婦が使うものなのだから、ハッキリした、見やすいものにするべきだろう。

⑤ 助産所での日課

病院の日課に対する問題点がでたところで、助産所等での産婦の日課をまとめてみよう。

助産所等では、産婦の日常生活により近い形で

生活ができるような時間割になっているようだ。たとえば検温1つをとりあげても、U助産所では最も体温の高くなる午後3時に1回のみ行ない、早朝の検温は、「必要ない。その分ゆっくり眠らせてあげる」ことにしており、必要な場合には随時はかるようにしていると答えている。

退院指導についても、助産所等では個別の指導であるため、ある母子健康センターの産婦は

・あまり時間を気にせずに相談にのってもらえて良かったと思っています（S母子健康センター）

と述べている。また、その指導の仕方についても、T助産所では退院前に産婦達と助産婦がお好み焼きを囲みながら話合う機会が持たれるなど特色がある。ある産婦はそのことを次のように述べている。

・食事の時に皆で集まる場所を提供して下さり、いろいろ皆と話ができてよかった

ある病院の産婦が食事について、

・夕食が早いので夜遅くなるとお腹がすき、もう1度何か食べないと眠れなかった（B病院）

のように述べているが、これと比べると以下の2つの記述は、助産所等における生活の柔軟さをよくあらわしているといえよう。

・産後ものすごくおなかがすきました。だから3食の食事だけでは足りなく困っていました。それが、3食の食事だけでなく夜食が出たのでうれしかった（T助産所）

・子供を3日目に部屋に連れて来て下さったのですが、夜、気になってよくねむれなかったのですがその日から預かって下さったので大助かりしました。ありがたくて…（U助産所）

4) その他のことについて

赤ちゃん、産婦の体の具合、入院中の日課以外の点で入院中に困ったり、とまどったことがあれば書いてもらった。

自由記述の内容は多岐に渡っているので、特定のものに集中する傾向はみられないが、その中でも多いものは次の通りである。

1位	設備の悪さ	16人	25.4%
2位	食事のまずさ	5	7.9

① 設備の悪さ

使いやすく、清潔な設備を求める声がある。トイレや病室の清潔を希望する人は特定の病院に偏っている。

・洋式トイレが少ないのでとても困りました。各部屋に1つずつくらい欲しいです（D病院）

・お手洗いがほとんど和式だったので、産後すぐは大変つらかったです。ひとつだけ洋式のがあったのですが、ずっと『故障の為使用禁止』の貼紙がありました（N病院）

・トイレの押ボタンは重くて、産婦にはきつかった（C病院）

・病室やトイレの掃除が十分でなく、トイレなどはきたないといっていいくらいなのは一番困りました。助産婦学校の生徒さんは朝、掃除にこられてもおしゃべりのみして、まともにやっていないようです（J病院）

・抜糸後、シャワーを使用していいとのことだ

I章 看護への産婦の評価と助産婦の意見

ったので行ってみたが、使い方の説明が書いてないため、ひねっても出てこなかったの、洋服を着て出ていくのも面倒だったので、やめた（F病院）

・ゴキブリや小さい茶色の虫がとっても多いので注意して下さい。小さい虫が赤ん坊の耳の中にでも入ったらたいへんです（B病院）

・北側の窓の近くのベッドで、夜は非常に寒く母子ともに、安眠できなかった（J病院）

・赤ちゃんを部屋につれて来てもベビーベッドが足りないため、母親と同じベッドに寝かせた。落ちては困るので、安心して休む事ができず、困りました。何とかして下さい。部屋に時計がないので時間がわからないので、授乳等の時困りました（N病院）

設備にも関連するが、病院内のどこに何がある、どうやって使う等の説明（オリエンテーション）が不十分なためにとまどう人もいます。

・入院時、病棟内を案内して頂けなかったの、母親学級時に見学したとはいえ、場所がわからず、同室の方に伺った（K病院）

・オリエンテーションが不十分のところがあり、同室の人に聞いたり、看護婦にその時になって教えられたりした事があった。また、後から入った人が看護婦にオリエンテーションを受けているのを見たり、聞いたりして知った事もあった（C病院）

そして、オリエンテーションについては次のような要望が出されている。

・病棟内での物のあり場所（ゴミ捨て場、お茶etc）を教えてください（M病院）

・病院生活にまず慣れないので、お茶のもらい方や下膳の仕方等、細かな事まで、いちいち聞かすが、ていねいにやさしく教えてほしい（D病院）

・私は2度共、ここで産んだので院内のことがわかっていますが、全般に日常生活の方法等説明をていねいにしてほしい（D病院）

産婦の中には、

・むしろ、入院生活に疲れて神経が参りました（はじめて、入院というものをするので）（J病院）

のように、今回の入院で初めて入院生活を経験する人もいることを考えると、精神的な緊張を少しでも小さくするのに、入院生活についてのオリエンテーションは欠かせないものと言えよう。

大部分の人は、妊娠中は外来との接触が主であり、いよいよ出産となってから陣痛室一分娩室一褥室と移動する。上記の産婦ほどでないにしても、産婦はあわただしい気持ちでいるから、通りいっぺんのオリエンテーションでは、不十分かもしれない。

病院とはシステムの違いがあるので同列には扱えないが、ある助産所では、陣痛が始まったら、すぐ入院し、半日か1日位を「昼寝をするつもりで」助産所で過ごすことを妊婦にすすめているそう。このことのためばかりとも言えないが、産婦がゆったりした気持ちで過ごしていることは次の記述からもうかがわれる。

・助産所全体が家族ぐるみの感じなので、とてもゆったりした気持ちで入院してしまいました。食事満足。また来たいなあ、と思いました（T助産所）

② 食事がまずい

食事がおいしいことは、産婦にとっては入院生活での1つの楽しみであろう。ところが食事について、病院では次のような不満がでている。

- ・食事はまあまあだとは思いますが、朝食はごはんのみそ汁、つけものの他にもう一品増やした方がよいと思った（たん白質、たとえば生卵など）（B病院）

病院では、食事については看護職が問題があると感じても、看護職の意見だけで簡単には変えられないということがあろう。一方、ある助産所では献立、材料の吟味、調理まで助産婦が関わっている。すでにみたように夕食を出したり、お好み焼きパーティを行なうなど、かなり自由がきく。助産所の産婦は食事について次のように述べている。

- ・食事はあたたかいものばかりで、たいへんよかった（T助産所）
- ・妊娠の身になってやさしく指導し、お世話をしてくれます。食事も、栄養・カロリーを考えしてくれるし、夜のお茶（9時）もちゃんと出してくれ、とてもおいしくて楽しい入院生活でした（T助産所）

3 助産婦の意見

1) 入院中の日課のたて方

問 あなたの看護チームでは、妊産婦が生活しやすいように入院中の食事、授乳、検温、保健指導などの時間割りを決めていきますか。

- | | | | |
|----|-------------|------|-------|
| 1位 | 妊産婦の都合を調べては | 458人 | 44.9% |
| | いないが、合っていると | | |
| | 思う | | |
| 2位 | 妊産婦の都合を調べてそ | 253 | 24.8 |

れに合わせている

- | | | | |
|----|-------------------------|-----|------|
| 3位 | 合っていないと思うが、そのままにしている | 132 | 12.9 |
| 4位 | 都合を調べたら合っていないがそのままにしている | 29 | 2.8 |
| | 無回答 | 148 | 14.5 |

入院中の時間割りが妊産婦の生活に合っていないと感じている助産婦は15.7%、入院中の日課について困ったり、とまどった母親は13.7%と、ほぼ同じであった。

2) 助産婦が考える入院体制の改善点

次に、入院生活が妊産婦の生活に合っていないと助産婦が思うことを、自由記述から探っていく。

授乳時間、検温時間、指導の時間、食事時間等1日のスケジュールについては次のものがある。

- ・深夜勤が2人のため、妊産婦の検温を午前4時30分から行なっている。5時から妊産婦は授乳がある。4時30分（起床）という時間は妊産婦にとっても、スタッフにとってもきつい時間である。検討はしたが、3人夜勤にならないとどうしようもできない。他病棟は、まだ1人夜勤があるという現状である。

ハードスケジュールの結果、産婦の休養がとれないことの問題意識もみられる。

- ・産後の休養、実態とニード
- ・母児同室を出産後2日目から行なっているが、同室をなるべくのばそうとする母親が多くなって来ているので、その原因とか、児を預った方がサービスなのかどうか。

I章 看護への産婦の評価と助産婦の意見

そして、ハードスケジュールを緩和するために入院期間をのばしたいとまで、助産婦は考えている。

- ・妊婦の入院が多いので褥婦が4～5日目退院の現状です
- ・現在、産褥5日間の入院であるが、これは短

期間内で、退院指導が十分できていないと思うので入院期間を長くしたい。

しかし母親側としては、短期間だからハードスケジュールに耐えよう、という気持ちもある（P25参照）。

4節 産婦の満足感と希望

1 病院サービスへの満足感

病院のサービス全体を通して見たときの満足感を、「次子出産の場合、同じ施設で出産する意志があるか」と「病院サービスに対する満足感の自由記述」からつかむ。

1) 次子出産

表1-12のように産婦の大部分は次子の場合も「同じ施設にする」と答えており、病院と助産所

等との間に差はない。

最もその割合が低い施設でも83.8%である。

2) 病院サービスへの満足感

設問は「妊娠から退院までの病院のサービスについて満足だったこと」であるが、自由記述をみると、病院サービスを全体的にとらえた表現よりも、看護職からうけたサービスに焦点をあてたものが多い。

自由記述を内容により分類したものは表1-13

表1-12 もし次のお子様が生まれるとしたら、またこの病院にしますか

	全 体		病 院		助 産 所 等	
はい	92.0%	994人	91.8%	854人	93.3%	140人
いいえ	2.7	29	2.9	27	1.3	2
無回答	5.3	57	5.3	49	5.3	8
計	100.0	1,080	100.0	930	100.0	150

表1-13 妊娠してから退院までの間の病院のサービスについて、うれしかったことや満足だったことを書いて下さい（複数回答、無回答除く）

	全 体		病 院		助 産 所 等	
1 各種の指導が親切、丁寧	27.5%	213人	25.3%	192人	20.2%	21人
2 看護職が親切	25.7	199	23.6	179	19.2	20
3 看護職に（指導以外で）してもらったことに感謝	22.6	175	20.9	159	15.3	16
4 質問にこたえてくれた、頼んだことをしてくれた	12.9	100	10.9	83	16.3	17
5 施設内の全員が親切	12.6	98	10.0	76	21.2	22
6 看護職は話しやすい、話しかけてくれる	7.6	59	6.3	48	10.6	11

である。

この結果をみると、病院と助産所等とでは満足感の項目に差があることがわかる。病院では、各種の指導など、看護職にしてもらったことをうれしかったと述べる人が多い。一方、助産所では「助産婦はじめ従業員との親密な関係、家庭的な雰囲気」に対する満足を述べる人が多いといえよう。

産婦の満足感については、I章1～3節および後述の4節2においても触れながら述べているので、ここでは、それ以外の点についてまとめる。

① 看護職が親切

・ 沢山の看護婦さんの中で誰一人として感じの悪い対応をする人がなく大変やさしく接して下さって、そばにいてくれるだけで安心感がありました (K病院)

・ 外来、病棟を問わず、とにかく看護婦さんたちが通りいっぺんでなく、心のこもった親切さで接して下さった事です。特に入院中、遠く実家を離れて、初めてのお産だった私にとっては、中年の看護婦、助産婦さんが実の母の様な気がしてくる程、温かいものを感じさせて下さいました (D病院)

が代表的な記述といえよう。このように、「看護職が親切である」「親身に接してくれた」ことを書く産婦は多い。それでは具体的にはどんな点なのかを以下、みていこう。

② 各種の指導が親切、丁寧

乳房マッサージと授乳の指導に対する満足感が中心である。具体的記述については、I章3節2 (P22) を参照のこと。

③ 看護職にしてもらったケアに感謝

これは分娩直前から直後にかけてのケアと分娩

後の入院生活に関するケアとにわけられる。

まず分娩直前から直後にかけてのケアであるが、陣痛時のことについては、I章2節 (P11) を参照のこと。

分娩に関しては、同じ助産婦がついていたことや声をかけてくれたことで力づけられている。I章2節 (P12) を参照のこと。

次に、分娩後の入院生活中に受けたケアについてみると、その内容は洗髪、体をふいてくれること、見回りをしてくれること、夜間乳児を預ってくれたこと等、多彩である。

特に見回りについては次の記述のように、産婦にとっては看護職の顔をみるだけであっても「気遣ってくれている」という安心感がもてるし、また看護職に対する親近感も増すといえる。

・ 夜でも1～2時間おきに見回りに来て下さるので、わからないことがあっても、その時、その場で聞けるので入院中心配が何もなかった (Q病院)

・ 常時看護婦さんが各部屋を回っていて、妊婦の状態を気遣っているのがうれしく思いました (C病院)

・ 完全看護ですので家の者の手をわずらわせなくて良い。夜中でも、11時、2時、4時と回って来て下さるので安心していられる。1人1人の患者さんの事を良く知っていてくれるらしく、どの看護婦さんが来ても親身に話し容態を聞いて下さる (D病院)

・ 流産を心配しながらやっと産めた子供なので、心から祝福され、とてもうれしかった。同室の人が熱を出したり、出血が多かったりで、その度、ビックリするくらい頻繁に看てくれることに満足した (C病院)

・ 帝王切開で術後、付き添いなしでしたが、不

I 章 看護への産婦の評価と助産婦の意見

自由は全くありませんでした。熱があれば氷まくらをつけてくれるし、下の世話も何から何まで、てきぱきと親身にみてくれて感謝しています。どの人も感じがいいと病室でも話題になりました（C病院）

- ④ 質問にこたえてくれたこと
 - ⑤ 看護職から話しかけてくれたこと
- ともに4節2（P38, 41）を参照のこと。

2 看護職への希望

すでにI章の1～3節において、個々の項目の中にも、看護職に対する希望や要望があらわれていたが、最後に、「看護婦や助産婦に望むこと」として自由に記述してもらった。

この項目は看護職に対する産婦の不満というよりも、入院中に実際にサービスを受けた産婦が、看護職は何をする人がわかった上で、看護職にさらに期待するものが述べられているととらえるべきだろう。

結果は表1-14の通りである。自由記述を内容により分類したこの結果をもとにみていこう。

1) 望むことはない

「望むこと」という質問に対して「現状のまま満足である」と答えているのは、回答のあったうちの44.1%を占めている。

病院については、同じ病院の中に「今まで通り

で良いと思う」という満足派と何らかの要望を述べている人が混在しているが、中には満足派が10%程度に過ぎない病院もある。

満足しているという、病院で出産した人の記述をみていこう。

- ・望むことというよりも看護婦さんや助産婦さんに私の望むこと、すべてしていただきましたのでこれ以上のことはありません（K病院）
- ・安心して出産ができ、とても親切にされましたので、友達にも紹介しました。このままで他に望む事はありません（G病院）
- ・色々親切に教えて下さったし、いろんな細かいところまで気をつかわれて、本当に感謝でいっぱいです（B病院）

また、今まで入院したことがないとか、初産の産婦達は「看護職の仕事を知った」「頑張ってるほしい」と述べている。

- ・望むことというより、私は入院の経験は今まで皆無だったので看護婦さんや助産婦さんの仕事についてよく知らなかったのだが、今回入院してみて大変な仕事だなとつくづく感じました。にもかかわらず、私の入院した病院は皆さん親切で感じがよく、安心してまかせられました（A病院）
- ・今まで病院などに縁のなかった私でした。不

表1-14 最後に病院の看護婦や助産婦に望むことを書いて下さい（複数回答、無回答者除く）

	全 体		病 院		助 産 所 等	
	割合	人数	割合	人数	割合	人数
1 望むことはない	44.1%	195人	42.2%	171人	64.9%	24人
2 やさしい態度で	22.9	101	23.5	95	16.2	6
3 指導を丁寧に、やさしく	9.8	43	10.1	41	5.4	2
4 尋ねたことに対応してほしい	8.2	36	8.9	36	—	—
5 やさしい言葉使いで	6.3	28	6.7	27	2.7	1
6 話しやすい態度、話しかけて	4.8	21	4.9	20	2.7	1

安で不安でどうしようもなかったのですが、とても親切にさせていただいてよろこんでいます。今後も今以上に親しみやすい看護婦さん助産婦さんになって欲しいと思います。どうもありがとうございました（C病院）

・お産というものは、女にとって本当に大きな仕事だと思いました。しかも初産の場合には何かと不安がつきまといきます。そんな中でみなさんのきびきびした処置や助言がどんなに頼もしく思えたか知れません。プロとしての誇りと厳しさを見る思いでした。どうぞこれからも次々とお世話になる新米ママたちをやさしく、厳しく励ましてあげて下さい（G病院）

・今のままで良いと思います。重労働で神経も使い、まちがいが絶対に許されない仕事です。それだけにやりがいもあると思います。身体に注意してより信頼されるプロになって下さい（D病院）

次に助産所等をみると、何らかの記入のある人の65%は「現状のままで満足」と言っている。

- ・帰りたくないほど満足だった（T助産所）
- ・これ以上の事なし（U助産所）

病院と違い、助産所等では「満足」と言いながらも助産所の存続について、次のように気づかう記述もみられる。

・先生（助産婦のこと 註）もお手伝いさんもやさしく親しみがもてて家族的なつき合いのできる所ですから、これからは看護婦さんが変わっても、この助産院のイメージをくずさずいつまでも保ちつづけてほしいです（T助産所）

・現在のT助産院が後々まで続くように後継者がいらっしやれば、と思います。（3人とも私は安心してお産ができましたので是非次の代（娘）にもT助産院で産んで欲しいため）（T助産所）

・次のお産をするまで先生お元気で居て下さい。看護婦さんもお嫁に行かないで下さいませ。ありがとうございました（U助産所）

2) やさしい態度で接してほしい

この項以降は、約半数が書いていた看護職に対する希望や要望についてみていこう。

まず「やさしい態度で接してほしい」であるが、看護職に望むことの中で最も多かった。ある産婦は自分の経験から次のように述べている。

・G病院は看護婦さんがやさしいので良いが、X病院の看護婦など鬼のようにこわい人が多いので病気になっても看護婦さんのイヤなところへは入院したくない。先生の良否もさることながら看護婦さんの良否の方が問題だと思う（G病院）

「やさしく」という表現は非常に漠然としているが、こういった希望を書く産婦たちの中には、看護職とのコミュニケーションがうまくとれなかった人がいたかもしれない。

・入院している間は、看護婦さんや助産婦さんが頼りなので、いつもやさしい気持ちを持ってほしいと思います（A病院）

・私たちが困っている時や不安な時は親切に接してほしい（C病院）

・事務的でなく愛情をもって接してほしい（C病院）

I 章 看護への産婦の評価と助産婦の意見

・厳しい態度も必要だろうが“いたわり”の心も大事にして欲しい（B病院）

「やさしい態度で」の記述の中には、「患者の立場にたって接すること」を望む人も含まれている。これらを読むと、不安な気持が看護職にわかってもらえないと産婦が思う場面がかなりあるようだ。

「患者の立場にたつ」ことは、いわれるまでもなく看護職は承知していることだろう。現に、産科婦長に対して「つねづねスタッフに言っていること、あるいはモットー」を尋ねると、次のような回答が返ってくる。

- ・妊産婦の身になって看護すること
- ・患者には常に親切に。患者の気持のわかる看護をしよう
- ・自分が看護を受ける立場になった時のことを思って患者さんに看護して下さい

しかし、「患者の身になって」ということが看護職全員に徹底するのは、なかなかむずかしいことは産婦の記述からわかるだろう。

・みんな良い方たちなのですが、中には冷たい態度をとる方もいます。精神的に心細く不安がいっぱい入院しているのですから、暖かく接してほしいと思います（Q病院）

・どんな職業でも同じことですが、やはり相手の立場になって考えてくれて親切な方はすぐわかりますね。私も看護婦の資格がありますので、自分の姿を見ているような感じでした。特にやさしさ、親切を望みます。患者さんは不安ですものね（L病院）

・初めての出産の場合、十分な知識を持ってい

たとしても産まれるまでは不安が沢山ある。そういう産婦の気持ちをよく理解して接してほしい（I病院）

・看護婦や助産婦はいろいろなケースを見ているが、産婦が訴えている事に対して、一律な看護をしやすいのではないかと、同じ事でも不安が強い人もいれば少ない人もいるので個々のケースにあった看護が必要だと思った（D病院）

看護職自身、人員不足で産婦と話ができない、世話ができないと感じている（P81）が、産婦も看護職の仕事ぶりを見て「重労働で忙しいのだから」と理解は示しながらも、「ゆとりを持って笑顔で産婦に接してほしい」と言っている。

看護職は意識していなくても産婦からみて、言葉使いや態度が雑になることがあるのかもしれない。このような忙しさからくる看護職への近付きにくさを次のように述べる産婦もいる。

・人数が少なく、忙しい事が看護婦さんたちに近寄りやすいイメージを与えている。看護婦さんたちも決められたノルマだけをこなせば良いという意識が強く、看護婦という原点をもう一度見直して欲しい。年配の人の中には、話しかけただけでジロツとにらまれて頼みたいことも頼めない人もいる。初産婦は何もわからず、不安なのだから、助産婦さんはもう少し親切にして下さい（J病院）

・とても忙しく大変な仕事だと思いますが、疲れた時など時々ヒステリックになられている方を拝見します。産婦とか病人は特に感じやすいのであまり感情的にならないように（M病院）

・皆さん人手不足なので大変忙しいことはわかるのですが、病人でないとはいえ、産婦も産後は辛いし、初めてだとすべて未経験なのでもう

少しゆとりをもって暖かく接して欲しい（J病院）

・看護婦さんに…業務が忙しすぎるためなのはよくわかりますが、あまりにゆとりなく感じられます。尺子定規に扱うのではなく、産婦それぞれの状態を把握したうえでの対処の仕方をこころえてほしいものです（F病院）

また「笑顔で接してほしい」ということについては、次のように述べられている。

・交替の勤務は重労働だと思います。そのためイライラしたり、思わず不機嫌になったりすると思いますが、患者にはやはり明るくにこやかに接してほしいものです。人数をもっと確保して職場の労働条件をよくしながらつとめてほしいものです。お願いします（C病院）

・24時間休むひまなく動いている産科。とても大変だと思いますが、いつも笑顔をたやさず接してほしいと思います（F病院）

・看護婦の方や助産婦の方は仕事で毎日かも知れませんが、私たちは初めてだったり何年か前とかで、わからないことばかりです。毎日笑顔で接するように心がけてほしいと思います（D病院）

・笑顔をいつもたやさない看護婦さんや助産婦さんには、何でも頼んだり、きいたりしやすいので、いつも笑顔をたやさないでほしい（C病院）

3) 指導を丁寧に、やさしく

病院で行なわれている各種の指導については感謝の言葉が多かったが（P22）、その一方で、指導に対する様々の希望もあがっている。

これは、「～を指導してほしい」という記述

と、指導の仕方についての記述とに大きく分けられる。

まず指導を望む項目についてはいろいろ出されているが、特に初産婦からは「初歩的なことから丁寧に指導してほしい」という希望が強い。入院中は、すでにⅡ章3節3でみたようにいわば過密スケジュールで指導が行なわれているが、以下の自由記述をみる限りでは、産婦の知りたいことが案外、教えられていないと言えるようだ。

・初めてのお産の場合、わからないことばかりなので、当然だと思われるような小さなことでも、最初から教えてほしい。赤ちゃんの抱き方、扱い方なども（M病院）

・初産の人のための育児指導を徹底的にして欲しい（たとえば、子どもの抱き方、おむつの当て方等、細かいことを教えてほしかった。自分の場合、となりのベッドが経産婦だったため1からその人に教えてもらった）（J病院）

・初産婦に対してもう少し授乳の仕方、あるいは産後の陰部の消毒の方法を具体的に説明してほしい（M病院）

次に看護職の指導の仕方については、一言でいえば、「やさしく」という意見が出されている。

2) でみた「やさしい態度で接してほしい」という希望が具体的には指導の場面についてだされたいえよう。

・看護婦があまりにもヒステリックで、不親切で厳しすぎるし、意地が悪すぎる。私の場合初めてのお産だったので何をして良いか、てこずったこともあったりしたので、もっとやさしく親切に指導してほしい（A病院）

・1人1人ていねいにもう少し時間をかけて入

院中に退院後の指導をしてほしい（H病院）

・お乳のマッサージにより少しずつお乳が出るようになったけれど出ない人にとっては、とても厳しいと思う（D病院）

4) 尋ねたことに対応してほしい

この項目には次のような内容が含まれている。

- ① 産婦の訴えや質問をきちんとときき、きいた上で、説明したり答えてほしい。
- ② 説明が看護職間で一致してほしい。
- ③ 頼んだことは忘れずに実行してほしい。

これらの記述は表1-14を見てもわかるように、助産所等ではみられない。このことは、4節1の「満足感」において、病院では助産所等に比べると、「看護職が丁寧に説明してくれた、相談に乗ってくれた」「頼んだことに対応してくれた」等について記述する率が低いことと関係があると言えそうだ。

①～③の内容によって、自由記述をみていこう。

- ① 訴えや質問をきちんとときき、きいた上で、説明したり答えてほしい。

産婦が不安な気持ちを訴えたり、質問をしても「看護職が、親身にきいてくれない」と感じられる場合があるようだ。

・個人差があるかもしれないが、腹痛がするといっても様子をみましょうの一言ですまされてしまって、患者の身になって聞いてくれなかった（F病院）

特に、初産婦からは「不安になることが多いため、看護職に質問するのだが、それが受けとめてもらえない」との声もある。そしてその理由として「看護職にとっては当たり前のことだから親身に

なってもらえないのかもしれない」と言う人もいる。

・特に第一子出産の折は不安なことが多いものです。ささいなことでもおどおどしたり、びっくりしたりの連続ですが、看護婦さんには日常茶飯事のことばかりでしょうが、どんな点が不安なのかをよく聞き取る態度がほしい（F病院）

・初産で、わからないことやどうすればよいかとほうにくれている時、ある看護婦さんに聞いたところ、とても不親切な返答で、精神的に落ち込んでしまった。初めての事で余裕もなく不安な時には、患者側に立ってもっと親切に教えて欲しい、と心から思いました（D病院）

・お産はいうまでもなくひとりひとりケースが違うはず。一般常識にとらわれず、特に初産の妊婦さんの訴えには耳を傾けてほしいと思います（H病院）

そして質問をうけた看護職の答え方については、「産婦に納得のいく説明」「不安をとりのぞくような説明」が求められている。

産婦は「安心したい」という気持ちで看護職に尋ねるとも考えられる。そこをところを理解して対応する必要があるようだ。

・経験があるからといって納得のいく説明をしないで行動をしないで欲しい。特に私など初産で何も知らず、とまどうことばかりだから、忙しくても“こうだから、こうするのです”という説明をお願いします（M病院）

・産後は神経が敏感になっているのでささいな事でも気になってしまうので心配がないということをよく説明してほしい（L病院）

- ・結構、色々な事を聞いておきたいのだが、その都度でいねいに不安をとりはらうような返事がほしい (D病院)
- ・先生によってよく調べてくれる。それによってよいアドバイスをしてくれるという人とそうでない人がいるように、看護婦さんも安心して話しかけられる人と、そうでない人がいる。こちらは真剣な気持ちで問いかけているので親身になって答えてほしい (F病院)
- ・患者の身になって小さなことでも、いっしょに考えて下さることを望みます (I病院)
- ・不安な点やわからない事を理解できる様に教えてほしい (M病院)

看護職に相談したいと産婦側が感じてもしかしうで、受けとめてもらえないようだという人もいる。

- ・相談にはとても親切ですが、もう少しゆっくり相談できる時間があれば良いと思う (H病院)
- ・看護婦さんは他の婦人科の患者で追われるため非常に忙しそうで、あまり相談相手になってくれなかったけれど、もう少し親切にしてほしかった (J病院)

一方、看護職がよく相談にのってくれたことを次のように感謝している産婦もいる。産婦自身が「ささいな事、ちょっとした事」という書き方をしているが、それが看護職に受けとめられ、きちんと答えてもらえたことで、安心している様子がうかがわれる。

- ・子どものことやお乳の飲ませ方について等々どんなにささいなことを尋ねても看護婦さんた

ちはいつもわかりやすく親切に答えて下さったこと (G病院)

- ・こちらが納得のいくように体の様子や赤ちゃんの質問にいていねいに答えてくれたこと (D病院)
- ・こまめにつまらない事でも相談にのってくれて親身になって考えてくれて、うれしかった。子どものことは私にはまるでわからない。自分のことのように考えてくれた (Q病院)

看護職の対応で、安心できたことを次のように述べる人もいる。

- ・退院指導で私の子どもは“少し黄疸が激しいので明日もう1度検査をしましょう”と言われ不安で、不安で…。そのことを助産婦さんに言うと“検査をする程でもないのに、小児科の先生がそう言うのなら検査をして安心して帰られたら…”と言って下さり、その言葉がどんなに私を安心させてくれたか。今でもあの時の助産婦さんの笑顔が目についております (M病院)
- ・ちょっとしたことでくよくよ心配していた時おおらかな気持ちで励まして下さったこと (C病院)
- ・途中流産をしかけたため、いろいろ心配、不安がありましたが、親切にいろいろ答えていただき、とても良かったです。(本当に心配をとりのぞき、安心が第一だと思いました) (E病院)

② 説明が看護職間で一致してほしい。

受け持ち看護職がいてほしい理由としても「看護職間の(意見の)くい違いがなくなるから」があがっているが (P61)、「入院中は看護婦さんだけが頼りなのですから」(A病院)という産婦に

I 章 看護への産婦の評価と助産婦の意見

とってみると、看護職間の意見のくい違いによって、戸惑いや不安は大きくなるようだ。

- ・聞く人によって答えが少し違う場合、なんとなく不安になりました（D病院）
- ・特別ではないが時折、新生児に対しての意見の違いが見られたので初めての人にとってはどちらにしたらよいか迷う事があると思うので同じ指導に統一してほしい（Q病院）
- ・みな忙しそうで言うことが人によって違うのでとまどいました。とくに私の意志が弱いのかもしれませんが（J病院）
- ・同じ質問でも看護婦によっていろいろな答えが返ってくるので、とまどうことがあった。統一してほしいと思う（C病院）
- ・看護婦さんや助産婦さんの指導で、多少人によって異なることがあるので、指導方針をきっちり立てて欲しい（A病院）

また、このようなくい違いの原因を看護職の経験の差によるものという産婦もいる。

- ・出産後、いろいろな細かいことで人によりまったく違った事を言われるのでどちらを信じたらよいか不安になるので、それぞれの経験などもあるとは思いますが意見を統一しておいてほしいと思います（Q病院）
- ・たとえば1つの事を聞いても若い看護婦さんなどは“こうじゃないかしら？”と自分でも不安な答えを出し、また反対に年輩の助産婦さんに聞くと1人は右、またもう1人は左というように、まるっきり反対の答えが返ってくる事が多いので、初めて出産した人などは、どれが正しいのか迷ってしまう（J病院）

③ 頼んだことを忘れずに実行してほしい

看護職に対してむやみに要求を出す産婦は、今回の調査結果を見る限りでは、それほど多いとは思われない。むしろ、「大変忙しいのでむずかしいとは思いますが」（G病院）、「勤務条件がハードで人手不足の現状では無理な注文かもしれない」（B病院）のように、看護職に遠慮したり、気を使ったりしている。それだけに、産婦が看護職に何かを頼むことは勇気のいることであるし、どうしても看護職の手を借りたい場合であるといえよう。

- ・忙しいことを理由に、頼んだ事をあとまわしにされて随分いやな気分にした（A病院）
- ・看護婦さんによって体調の悪い時にすぐ手当をして下さる方と、そのまま聞きのがしてしまう人がいるが看護婦さんにとっては重大なことではないにしても、本人の身になったら心配なことなので一応説明してほしいと思います（G病院）
- ・勤務条件がハードで人手不足の現状では無理な注文かも知れないが、頼んだ事は「聞きおく」ではなくて責任もってやって欲しい。何回頼んでもやってもらえない事があった（B病院）

具体的に看護職からどんな対応をされたのかは次のように述べられている。

- ・お乳を飲ませにいくと、いつも寝ているので、よく寝ているか聞くと、“あ～あ、よく寝ている”とどうでもいいように言われた。それに子供の爪がのびているのを“切って欲しい”と頼んだがなかなかしてもらえなかった（M病院）

5) やさしい話し方で

看護職の言葉使いに対しても希望が述べられている。

・お産は病気ではないけれど、手術したりした場合とはとても不安な状態の時なので、あまりズケズケと物を言ったりしないで欲しい (M病院)

のように、産婦の不安定な精神状態を理解した上で話をすることが望まれている。

実際にはどのような話し方が、産婦の印象に残っているのかをみていこう。

・助産婦さんの中には無神経な人がいて、ある人はお乳をやっている母親に指導に来て“ぶさいくな子じゃな”と言っていた。言われた方は随分傷ついたと思う。母親の気持ちを考えて接してほしい (M病院)

・お産で心身共に疲れ、また初産の場合、育児は初めての経験。授乳等、うまくできなくても“母親のせい”というような言葉はさけてほしい (Q病院)

・ブザーが鳴ったら赤ちゃんをとりに行くようになっていますが、早かったり、ブザーが鳴らないので待っていたら“時間はわかっているでしょう。そちらの都合で早かったり遅かったりはいいのですか”と言われた。ブザーがないのに遅かったら怒られるのはどうかと思います (M病院)

このような看護職の対応について、

・年配の助産婦さんに時々しかられショックを受けたことがありました。私にとってはすべて

が初めてなので、頭からおさえつけるようなおっしゃり方は少しひどいと思いました (N病院)
・心にぐっさりつきささるような言い方をする人がいて悲しかった (J病院)

と、動揺する産婦がいるし、次のように要望する産婦もいる。

・特に産婦に指導する時、注意を促す時等は言葉や態度に注意して周囲で見たり聞いたりしている人が恐れを感じないようにして欲しい (此られていたというのは注意、指導されていた時の事と思うので) (C病院)

6) 話しかけてほしい

これは、看護職の方から産婦に様子を尋ねたり、「ちょっとした言葉」をかけたりしてほしいという記述である。

相談したいことがあっても、「看護職の忙しさ」をみると産婦から話しかけることはなかなか勇気を要することといえる。それだけに、看護職からの一言で、産婦は、看護職が自分に注意を向けていると安心したり、うれしく思うのだろう。

・看護婦さんのやさしい言葉でうれしくなる事が多いので「どうですか」の一言をかけて下さると良いと思います (D病院)

・お産のあとの疲れた体には、何気ないちょっとした言葉、たとえば、良かったわね、赤ちゃん元気よ、などがとても嬉しく感じるものです。昼夜なしの大変な職業ですが、頑張ってください (D病院)

・“何も変わったことはありませんね”ではなく“何か変わったことがありますか”と聞いて欲しい (B病院)

次に、看護職から声をかけてもらったという産婦はその安心感を以下のように述べている。

- ・検温の時間に“どうですか？”と聞いて下さるので細かいことでわからない事等心配事をその時聞いていただき安心しました（F病院）
- ・看護婦さん全体に指導がゆきとどいていても安心でした。産後、体のあちこちが痛んでいて不安だらけにいる時、いつも看護婦さんがやさしく声をかけてくれたり、見に来てくれるのでとても助かりました。いつも明るく声をかけてくれる事で不安が安らぎます（D病院）
- ・初めての入院、手術、育児のため、不安がありました。が、“心細い”と感じる時、必ず看護婦さんが顔を出して励まして下さり、肉親でもここまで行き届かないとつくづく感じ、心より感謝しております。明日退院するのがお名残り惜しいです。皆様ありがとうございました。（追）健康で大きな甘えん坊の男の赤ちゃんがほしかったのです。望み通りの子供に逢えて不出来の母親としては大満足です（D病院）

⑦ 人員不足

看護職の人員が不足しているということについて書かれたものをみよう。

すでにみてきた②～⑥の項目の中にも、次のような形で人員不足に触れる人は多い。

- ・もう少し人手をふやせたら患者も遠慮なく何でもたのめるのにな…と思いました（L病院）

ここでは、産婦が看護職の人員不足を実感した場面を特にとりだしてみる。休日と夜間の少なさが中心といえる。

- ・休日は手が足りないみたいなので看護婦さんがとても忙しそうだったので、頼んだ事もなかなかやってもらえなかった。休日のことをもう少し考えてもらえたら、と思う（H病院）
- ・2人共に夜のお産でしたが、進行が早く頭が見えた時、準備ができていない状態でした。夜間にもう少し人手が多かったら、と思いました（M病院）
- ・夜間等少ない人数で分娩がいくつもある時など、声をかけるのもためらう時があります。もう少し余裕のある勤務をしてもらいたいと思います（C病院）
- ・夜間の出産が多い時、看護婦さんの手が足りないため、分娩直後の夜、コールしてもなかなか来てもらえず不便を感じた（E病院）

休日や夜間に限らず、看護職の手が分娩にとられてしまい、「看護職が誰もいない」ような状態に不便を感じたり、不安になったりする産婦は多い。

- ・お産がはじまると全部の看護婦、助産婦さんが詰所にいなくなります。やはり、動けない人もいますので何人か詰所にいてほしいと思います（B病院）
- ・お産の人が多いと看護婦さんや助産婦さんもしがしく、ミルクをもらいたくても、だれもいなかったりすることがある。必ず1人ミルクやおっぱいのぐあいなどをみってくれる人がほしい（C病院）
- ・夜中にお産のある時等、ガーゼをもらいにくくても誰も居なくて長く待ったりしたのでいつも1人は詰所に居てほしいですね（B病院）

5 節 助産婦にとって満足のいく看護

「満足がいったかどうか考えたことなどなかった。失敗はなかったか、とか、他にもっと良い方法がないだろうかというようなことは考えるが、満足のいく看護について……むずかしい問題だと思う」

「ミスがないのが満足かもしれません」

これらは「あなたにとって満足のいく看護サービスができた事例がありますか」という問いに回答しなかった助産婦の言葉である。

本節では、自分にとって満足のいく看護体験があるか、何に満足を見いだすか、その時の妊産婦の反応、の3つの問いについて、助産婦の自由記述を整理する。仕事に満足でき、喜びを感じる事が新鮮な気持ちで仕事に立ち向かう勇気につながるのではないかと考えたのである。

1 満足感のタイプわけ

問 現在の職場で働く中で、あなたにとって一応満足のいく看護サービスができた事例がありますか

1位	満足のいく事例がない	406人	39.8%
2位	まあ満足のいく事例がある	317	31.1%
3位	満足のいく事例がある	155	15.2%
	無回答	142	13.9%

「満足のいく事例がない」人の何人かは、満足できない実情を次のように述べている。

- ・反応として不評ばかりきく、普通にいった人は黙っているからであろうか。
- ・病院及び看護部の産科病棟への理解が全然な

く、転病院をととも考えますが年齢制限があり、お金のために働くだけで毎日がむなしく暮らしております。

・医師と看護スタッフ、妊婦の看護目標が一致できない時。医師が異常分娩にしてしまうと反省してほしい日常も多いのが残念。

・患者の顔もわからないうち、あるいは1回しか会わないうちに退院となり、十分な援助ができていない。

・たとえば、乳緊(廿)の人に対して、もう少し看護側でみたいと思っても医師側で退院の運びとなり患者は心配そうであった。

そして、将来に希望を託す意見もある。

・いつも失敗だらけです。でもいつか満足のいく看護をやってみたいと思いました。

・親しそうに何でも相談をもちかけられるようになりたいものです。

自分として一応満足がいくという時、人によって満足の内容、満足の水準はさまざまである。「満足のいく事例がある」という人の91%、「まあ満足のいく事例がある」という人の73%は、どんな点が満足だったか、そして妊産婦当人はどんな反応だったか具体的に記入している。

1) どんな点が満足か

「満足のいく事例がある」「まあ満足のいく事例がある」という472人の助産婦の自由記述から助産婦の満足感は大きく4つの型にわけられる。

I型 妊産婦と深くかかわれたことに満足 29%

I章 看護への産婦の評価と助産婦の意見

を感じるタイプ

II型	看護の成果があがったことに満足を感じるタイプ	25%
III型	看護チーム全体で看護の改善にとりくむことに満足を感じるタイプ	10%
IV型	その他、特殊な問題をもつ妊産婦に対応できたことに満足を感じるタイプ	16%

そして、相手側の妊産婦の反応については次の5つの型にわけられる。

I型	妊産婦当人に満足された。喜ばれた、感謝された、礼状がきた等	36%
II型	信頼関係を感じた 打ち明けてくれた、心強いといわれた、コミュニケーションがとれた等	11%
III型	自分の働きかけによって妊産婦に変化がみられた 指導を実行しているのを確認した、母乳で育てたいという人が増えた等	12%
IV型	看護への期待が高まった 退院後もケアを希望、マッサージを希望等	5%
V型	その他	

妊産婦の反応が、「感謝、お礼」から「信頼関係」へと深まり、「相手の変容を招き」そして「看護への期待」が形成されていくというプロセスがうかがえる。いずれの段階にしろ助産婦は、妊産婦の反応が伝わってくることを、大きな励みにしているといえる。

次に、助産婦自身が感じる満足感とその時の相手の妊産婦の反応を詳しくみていこう。

2 満足のいく事例

I型 妊産婦と深くかかわれたことに満足を感じるタイプ

このタイプは、何かのきっかけがあって妊産婦に思いきりじっくり関わった、とか、妊産婦から思いがけない反応をもらったなどである。

1) 長期間の継続性

たまたま、入院中を通して1人の妊産婦を担当することができた場合である。

- 入院した時点からかわりあい、分娩介助、乳房の手当、悪露交換、授乳指導、沐浴指導、退院指導が入院中を通じてケアができたことはとても嬉しかった。勤務体制上、めったにできないことであるが、最近そのようにできたことがあった。(妊産婦の反応は)親しみが湧き、ことごとく相談してくれるようになった。初産婦だったからかも知れない。
- 母乳栄養についてくわしく説明でき、実行してくれた。たまたま入院、分娩、産褥を通して受持つことができた。(妊産婦の反応は)積極的に疑問点などを聞きにきた。

ただし、こういう機会は、「スタッフが整っていて十分な看護ができた時、時間の余裕があった時」や分娩の少ない時、あるいは次のように夜勤帯等、特別な場合に限られる。

- 勤務時間が当直の場合、16:40~翌朝10:00まで夜間3時間仮眠(お産のない場合)。その間の分娩に対しては1人の助産婦が看護しているわけですが、長い時間見ているので、産婦を把握することができ、親近感がわき、産婦自身

も指導説明したことを聞いてくれた時。(妊産婦の反応は)入院時によく私の勤務時間を確かめたりする。分娩中を通して1人の産婦についてだけでも満足感がある。

・陣痛誘発の患者に付添って、腹式呼吸の徹底指導を行ない不安を除き陣痛の緩和に成功したと同時に、予想より早い正常分娩ができたと思う。(妊産婦の反応は)陣痛時も、これなら耐えられると言って、笑顔で話しかけてきたり、その都度の指導に素直に応じてくれた。分娩にのぞむ余裕をみせてくれた。

分娩時付添うと産婦から「大変よかったと喜ばれ」、助産婦としてはうれしい反面、「多少手をかけすぎるくらいもあるかと」気になることもあるという。

1人の産婦とのつきあいが、入院中だけでなく妊娠中から退院後へと続いた場合は、助産婦も産婦もいっそう印象が強いようだ。

・妊娠経過を外来において見ておりました、なお夜間の分娩でもありまして、たまたま私が取扱うことになりました。少なからず顔も知っており比較的上手に呼吸法、及びリラックス状態が施行指導できましたので、お互い人間関係が保たれたせいか大変良いお産をしました。(妊産婦の反応は)安心してお産ができた由。お産の経過を知った上に補助動作の活用により、比較的楽なお産であろうと思われたとの事でした。

・とても正常分娩を望めそうもなかった妊婦が、スムーズに出産を終えた。1年間、職場や自宅へ不安な相談をもちこまれ少し悩まされたが、なんとか少しずつ自信をつけてゆき、生後1年の今では友人への助言を惜しまない人にな

っている。(妊産婦の反応は)出産まで不安をもっていたが、出産後の喜びは大きく、体力に自信を得て、また仕事(教師)にも今までにない自信を持つことができたという。明朗になった。

・家族計画相談で長年相談に通っている者(出産も3回当院)で、ベッサリー指導やIUD装着で6年間は避妊は成功していたが、妊娠してしまった。いろいろと相談にのった。その間も児の育児相談、検診相談も受けている。(妊産婦の反応は)相談後の結果についても電話連絡が本人よりあったりして、当方としてやりっぱなしになっていなくて、意志が通いあっていると思う。

意志が通いあう時「患者と助産婦という関係でなく、女同士、人間同士という反応」をもつに至るという声もある。この他に、妊娠中に安静のため長期入院した妊婦に継続的にケアすることも満足感としてあげられていた。

2) 産婦の希望に応じる

産婦と助産婦の気持ちが一致し、分娩に臨んだり、産婦の希望をかなえようと取りくんだ例である。

・産婦の訴えを聞き入れ、その家族ともコミュニケーションができ、分娩室へ入室する時間も適切(経過が非常に早く、判断が悪ければ陣痛室で産まれたケース)であり、お産自体も妊婦の自立したお産という風にもっていったから。

(妊産婦の反応は)3回目であったが、今までの中で一番すばらしいお産であったと満足し、その家族もともに喜んでいて。(これまでは産婦の訴えが無視され、経過が早かったのであわてたお産ばかりだったとのこと)

I 章 看護への産婦の評価と助産婦の意見

ラマーズ法を実践していきたいと思う助産婦と産婦が出会った所に、次のような満足感が生まれる。

- ・ラマーズ法を勉強してきた里帰り分娩者に、一部の助産婦だけであるが、助産婦たちが協力しあって分娩終了まで援助できたこと。（妊産婦の反応は）自らラマーズ法を分娩時に応用でき安産に終了できたことで喜んでいました。
- ・妊娠中からラマーズ法をよく独習している妊婦が入院時、絶対に会陰切開や裂傷をつくらないでほしい、医師も呼ばないでほしいというので、呼吸法と、怒責法を少し工夫し無事希望通り出産した。（妊産婦の反応は）自分の思い通りの出産ができて、本当によかったと感謝された。
- ・院外でラマーズ分娩の講習を受け、スタッフ間に理解の低かった頃に他施設や独学でラマーズ分娩を一応マスターした産婦との出会いにより、コミュニケーションを深める事ができ、スタッフにも理解を得られるようになってきた。（妊産婦の反応は）主に経産婦より初産婦の方が積極的に取り組み真剣さがうかがわれた。各期の呼吸法により分娩経過に対して理解でき、時間も短縮できたとし、苦痛も少なかったといっていた。育児に対しても積極的であるように感じられた。またアンケート調査にも協力的であった。

ラマーズ法を数人の助産婦が学んできた段階では、このような産婦の希望に対応してみることが、他のスタッフの理解を得られるようになっていくことがうかがわれる。これは、ラマーズ法に限らず新しいことを取り入れる場合にも通じることだろう。

ラマーズ法を一部でも取り入れている病院はかなり増えているようだ。調査対象となった産婦が出産した17病院のうち6病院が導入し始めている。

3) 産婦の確かな反応を確認

自分のしたことが、思いがけない程喜ばれていることが伝わって、喜ばれたこと自体が助産婦自身の喜びになっていく。

・関東から転勤になって間もなく分娩となり良人の留守に入院。心細かったが（夜間）公立病院でこんなに親切にしてもらってうれしかったと涙を流していたが、私どもは特別な事は何もせず同じ取扱いをしたままでです。（妊産婦の反応は）その夏、暑中見舞でお礼状がきました。

・産婦より相談を受けて応えたことが非常に患者さんに満足感を与えている一例を当院で実施したアンケート調査より知り、何げなく受け答えしている日常の勤務の中の会話によって喜んで頂けたことが非常に嬉しかった。（妊産婦の反応は）その時は特に私自身記憶がないのですが、アンケートの答えとして詳細に書かれていて感謝の気持ちが現われていました。

・自分が出産に当たった方が道で会っても必ず“いつぞやは大変お世話になりました。こんなに大きくなりました”と話されたり、また病院までわざわざ見せに来られる嬉しそうな笑顔を見る時、特に異常に立会った方の感謝の言葉は現在の業務をより一層大切なものにしてくれます。

妊産婦から積極的に期待され、質問がもとめられることの満足感もみられる。

・高年初産であり分娩に不安をもっていたが無

事出産、産後の経過も良好であった。(妊産婦の反応は)里帰り分娩で1か月過ぎ、自宅(神奈川)より電話連絡で、産後の出血と性生活に対する不安について問い合わせがあった。

- ・母親学級で質問が多く出て、それに対して納得いく説明をした。

- ・母乳推進しているため毎日マッサージしてもらえるとということで、ここに入院したとか、いろいろ教えてもらえるから入院したとかの声を時々聞いた。

- ・産婦に信頼され“この次の子もまたここで”と言われ、その後も病棟に顔を見せてくれる。

Ⅱ型 看護の成果があることに満足を感じるタイプ

このタイプは、危険の大きい出産を正常産に導けた、母乳ケアの成果があがった、その他の看護行為がうまくいった等を含む。

1) 難しい出産への対応

危険の大きい分娩を自分の適切な判断で、危険を回避し無事出産に導くと、そのことは大きな満足となる。

- ・子宮口全開大しても児頭下降せず、羊水は混濁、K.H.Tは時に9.10.10。これは臍帯異常と思ひ医師にたのんで吸引分娩。その結果は臍帯30cm、分娩後少々出血あり、胎盤剝離が一部あったが、胎児無事娩出。産婦にただ力ませていたらきつと赤ちゃんはダメだったと思う。早く正しい処置がとれて満足。(妊産婦の反応は)大変よろこんでくれた。

- ・前期破水、微弱陣痛で誘発中に臍帯脱出あり、危機一髪で難を逃れた事例。破水時は内診禁じられ、準夜から深夜へ申し送られ、心音が悪く、O₂流量するも快復せず臍帯に気づき、ア

プガールスコア3点で蘇生快復した喜び。(妊産婦の反応は)患者には説明していないので、あまり大した反応なし。

- ・満足といえるかどうかわからないのですが…。…。双胎、中毒症の初産婦で分娩後、産褥子癩を起したが、発見処置が早く軽症におわらせることができた。初体験の私にとっては非常に勉強になった症例である。(妊産婦の反応は)中毒症の恐ろしさに最初はびっくりしていたが、2人の子どもたちのためにも元気にならなければいけないと積極的な姿勢も見せてくれるようになった。

不幸なお産に終わった場合にも、産婦の悲しみを少しでも和らげ、産婦が現実を受け入れられるための援助ができることは満足感につながる。

- ・分娩監視装置を使用しており、FHRがベースライン160ぐらいで頻脈気味だったので、できるだけそばに居て、呼吸法・分娩経過の指導を患者の納得のいくよう実施した。(妊産婦の反応は)結果的に緊急帝王切開となり、ベビーは内臓奇形で出生40分で死亡した。しかし、後日たいへん感謝された。

- ・分娩移行中、横位を確認したが、医師は足位(膝関節)と診断し、完全に遷延、横位にて死産であった。長時間の分娩室での対立や分娩延期、患者の容態変化も起こさずに不安感なく無事異常もなく分娩を終え、主人とも、母体の回復に心がけるようはげました。(妊産婦の反応は)涙を流して感謝してくれました。その後1年後、妊娠した時、病院までたずねてくれ、今度も世話をしてほしいといわれ、ともに喜びました。予定日を迎え無事安産して退院後、時にベビーの成長をみせにきてくれます。

I 章 看護への産婦の評価と助産婦の意見

次の2つは児に障害があった場合の看護である。

・水頭症疑いの児を妊娠して、予め産婦も知らされ、経腔分娩して精神的にかなり動揺も見られたが、退院時は自己処理ができた様であったので、見守ることができた。これからまとめようと考えています。(妊産婦の反応は)当院で調べてもらって良かった。他院ではCPDでCSされて今頃は悲嘆にくれていただろう。皆も親切で……と。

・2回経産婦の方で兎唇の赤ちゃんができ、何日も哺乳に行かないので患者も何かあると気づいたがその事をよく説明し元気づけた。(妊産婦の反応は)兎唇も幸い軽度だったので哺乳ビンで十分哺乳できる状態でした。でも2~3日間はしかたがありませんでしょうが、隔離にて哺乳指導をし十分のめる事を確かめ安心して退院致しました。整形手術も終りきれいになったと喜び、今でも毎年、年賀状を頂いています。

2) 母乳ケア

母乳確立に力を注ぎ、効果があがってきていることの満足感がたくさん報告されている。

・母乳哺育を進めていますので、前回他院で分娩し、全く母乳を飲ませていない人達が、今回当院で分娩し母乳があまるくらい出て喜ばれることが満足です。(妊産婦の反応は)友達や近所の人に当院を紹介してくれます。

陥没乳頭や平べい乳頭で哺乳が難しい人への援助は次の意見が代表的である。

・平べい乳頭で母親の哺乳意欲も始めはなかつ

たが褥婦の気持ちを尊重しながら少しずつ援助することにより、母乳のみにて退院することができた。(妊産婦の反応は)乳房マッサージを始めはいやいやながらもさせる状態だったが、乳頭も少しずつ突出して、直接哺乳も少しできるようになる。それでも母乳への意欲は十分とはいえなかったが、退院前日頃及び当日は自ら進んでマッサージを依頼してきた。

1978年頃から桶谷式乳房治療手技が全国的に普及してきた。それから2年を経て、この手技を導入して著しい成果があがることが、助産婦の満足感として定着したようだ。

・助産婦生活25年の中で、はじめてふれた感動です。桶谷式育児のすばらしさ! 母親の求めている育児の原点を話すことができ喜ばれています。授乳困難を起こした褥婦と一体となって母乳哺育確立までこぎつけた時(出産時の喜び以上の喜びを示す)。また時々乳房のトラブルを起こしながらも、私達の手技でその困難をのり切り、無事1年間で離乳でき目のキラキラした丈夫な児を抱いた母親から喜ばれた。未熟ながら多くの人々に感謝されている。

(妊産婦の反応は)

①画期的な乳房マッサージだといって喜んで

いる。
②乳栓症で発熱と疼痛で紹介された授乳婦が1回の手技で全治。全身爽快となり大感激。

③乳腺炎前症で、他院でよくしぼりなさいと言われて来院。4~5日の通院で治癒。“桶谷式をどこでも受けられたらよいのに。お乳のことをよく知らない病院が多い”となげいた。

④褥婦看護の中でもマッサージをしながらの保健指導は喜ばれる。正常な乳房でもマッサー

ジは必要。心地良く素晴らしいケアができる。

・思い切って桶谷式マッサージをとり入れ母性関係者が一貫した看護サービスにふみ切って3年目に入った。最近、前回他院で出産した経産婦が目だって増えてきている。それは、退院後も継続して乳房管理をしてもらえるからだと言われる。忙しいけれども充実している。(妊産婦の反応は)1年間の授乳を終えて断乳にこぎつけた産婦の人々の満足感をひしひしと感じる。自分でがんばってきたこと。母性愛に満足している。

母乳確立する人の割合が、目に見えて高まったという報告もある。

- ・退院時の母乳栄養確立が(スタッフで勉強会や調査、援助をつづけて)約30%からこの1年で70~80%へとよってゆくことができた。
- ・桶谷式を導入して1年あまり、母乳栄養率が上昇した。初産婦0%(エストリールの影響)が81.8%に。経産婦13.8%(エストリールの影響)が100%に。

母乳マッサージに力を入れることで効果を確認でき、産婦にも喜ばれる一方では、100%確立にこだわりすぎて産婦の精神的負担になっていることも(P23参照)助産婦は気がついている。

・授乳に対して、あまり分泌がよくないので人工栄養を希望してきたが、母乳分泌の機序などを説明し補充しない方針でいき確立した。(妊産婦の反応は)やせてしまうのではないかと非常に心配の様子でしたが、哺乳量が増してきた時には本当にうれしそうに喜ばれた。

- ・母乳促進の線にそって指導及び処置を行なうために、それが非常に困難な褥婦があり、その時点では叱られたとか、トラブルとまではいかないが不満の反応があったが、退院時には完全に母乳哺育にこぎつけた。(妊産婦の反応は)不満や苦痛等が次第になくなり、明るさや親しさが現われ、助産婦さんは大変ですね、とか、がんばってよかったとか感謝して退院された。
- ・前は痛い割には母乳もせず3日間しかお乳をみてもらえなかった。しかし今回はよく出てうれしい……と遠くからも分娩にくる人が増えた。しかし反面、努力しても出ない人もあり精神的なストレスもかなりあり、残された問題も多く、考えていかねばと思っています。

また、産婦に喜ばれるが、「乳房マッサージのみに頼りすぎる様に思われる」という指摘もあった。

助産婦が始めた母乳ケアを、看護婦や医師にも広めていく必要があることが次の意見からうかがえる。

- ・桶谷式マッサージをとり入れたことによる乳汁分泌の好転、完全母乳指導の好成績。助産婦の私は満足し、その時点では妊産婦もよく反応してくれるが、医師があまり協力的でないため(上記について)産婦がとまどい、結果的には半数くらいが医師の意見を聞く。
- ・母乳推進に伴い、乳腺炎寸前の褥婦がある。指導通りに行なわないレベルの人がいる。その時少ない助産婦ではあるが退院後も継続的指導を行ない、乳腺炎を展開させ切開せずにいったケースが数件ある。母乳は以後継続されている。(妊産婦の反応は)“医師の説明より助産婦を信じている”と言う。“医師は切開しなさい、

I章 看護への産婦の評価と助産婦の意見

膿が分泌していても飲ませなさいと言うが助産婦さんに聞いてからにしようと思いました”という反応。

・乳房マッサージの手技を看護婦もマスターしたので、助産婦が分娩介助にあたっている時でも、褥婦の乳房管理ができるようになった。

そして、退院後も母乳ケアを続けるための体制づくりをすることが妊産婦から求められてくる。

・産褥4日目頃より乳房に硬結をつくり、児は吸嚙せず何回か乳腺炎症状を起こした。退院後も訪問し50日目頃にだいぶ状態が改善した。

(妊産婦の反応は)退院時、“みはなさないで下さい”と言われ頼られていると感じた。本人も根気強く頑張り、信頼関係もより強くなったし、何よりも赤ちゃんに母乳をやることの喜びを感じたらしい。

・病棟の助産婦によって母乳相談を行なっている。(退院した産婦を対象に)乳腺炎初期の治療、その他育児相談など助産婦業務の一端を遂行できて良かったと思っている。(妊産婦の反応は)満足して帰って行かれる。相談に行く所がないので、このような所があって便利だと喜ばれている。

母乳ケアに関する満足感は、看護技術の効果があげられたという側面とともに、看護技術を通して自分が相手に役立てたという実感＝妊産婦との具体的つながりが生まれたという側面も含まれているようである。I型の「妊産婦と深くかかわったという実感をもつ満足感」に通じる満足感である。

3) その他の看護行為

会陰切開せずにすんだことが満足という助産婦

も目立つ。

・陰裂切開をどうしようと思った時に、産婦(経産)に怒責について説明し、こちらの指示に従ってもらった。

・夜間分娩介助で会陰裂傷なしに出産できた時。(妊産婦の反応は)縫合の痛みを感じないで済むと喜んでいた。

・HB抗原(+)の分娩に対し、少しでも出血を少なくするため会陰切開、会陰リスなしで母児とも安全分娩できた。医師スタッフともに喜ばれた。(妊産婦の反応は)もちろん産婦も大喜びでした。

切開せずにすんだことが満足感になるということとは、逆にいえば切開するのがあたりまえになってしまっているのだろう。

この他に次のことがあがっている。

・看護とはややかけ離れるかと思うが私の実際行なって来た新生児臍落法に関心を持って頂けた事を何より感謝している。(妊産婦の反応は)退院後、臍部創面に気を使わない安心感がうかがえる。臍落が早く経過の良い事に、入院中は安堵の色がみえる。

・人工妊娠中絶の患者に失敗の原因をはっきりさせ、適切な避妊指導ができたと思っている。分娩に対する不安が強かったので喜んでいる。

・廻旋異常前頭位(大泉門圧迫)を早期発見によりKQTに注意しながら、指によって矯正し正常廻旋とし娩出可能となった。

III型 看護チーム全体で看護の改善にとりくむことに満足を感じるタイプ

・妊産婦に対して清拭及びシャワー浴が行なわ

れていなかった事について、状態に応じて清拭とシャワー浴を行なうことができるようになったこと。悪露交換をほとんど行なうことができなかったが、それを退院時まで行なうようにした。(妊産婦の反応は)当病院に勤めて4年。それまでいた病院での看護技術を生かし、当病院では行なっていなかったサービス面でほとんどの妊産婦が喜んで退院していったと思う。

・病棟独立を機会に従来よりの家族付添を廃止、スタッフ全員ベッドサイド看護を認識、妊産婦との信頼関係を努力している。(妊産婦の反応は)信頼の表情を示し、相談相手として話をする。分娩後は腕につかまって泣く、嬉しくて涙がでるといふ。児をしっかりと抱いて満ちたりた笑顔で帰宅していった。

外来での待ち時間が長いことを改善した例もある。

・母子健康手帖の記載項目の統一(外来～入院～産後検診時に活用する)。外来定期検診について予約制を導入。妊婦保健指導時間を明示し、集団指導と個別指導を選択的にとれるように配慮した。(妊産婦の反応は)待ち時間がなくなった。

以上は、病棟・外来の態勢は変えずに自分たちのできる範囲内で妊産婦への世話・相談のサービスを充実した例である。

さらにサービスを充実するために新しい部門を作って態勢を強化したことが満足感につながるという報告も目立つ。

・長年、場所と人手不足で開設できなかった母親学級を開設できたこと。医師の協力も大であ

ったことも幸いであった。(妊産婦の反応は)母親学級を受講していた人達は指導してもらったのでということで入院してからも大変親近感を持ってくれ、話やすい。また指導通り実行できた嬉しそうに言ってくれた。

・看護者側からの働きかけで外来指導室、及び母乳外来を開設し、利用者より感謝され私達も充実した日々が送れる。(妊産婦の反応は)軽度の妊娠中毒症も生活指導及び食事指導により経過良好、核家族の若い妊婦の不安感をとり除いてあげると喜々として再度訪室してくる。乳房のうづまりの悩みに毎日対応している。

だが、新しく態勢を作ることが全面的に満足というわけにはいかないようである。満足感の裏側には、不満と今後への課題もかかっている。

・病棟から毎日、外来へ保健指導におりています。保健指導におりたスタッフが、月、水、金の午後に家庭訪問が認められ、木、土の午後に母乳外来を開いたことで家庭内における母子保健管理の充実が図られるようになった。母乳外来を開いたことにより、母乳確立の向上、継続看護の土台となった。また家庭訪問等を通じて具体的な不安、及び問題を知り、病棟内の退院指導にフィードバックができること。(妊産婦の反応は)母乳に対する意識が向上。家庭と病院が「継続されている」ことに対する安心感がある。私たちの病院はやりたいと思う看護はすぐに展開され、ニーズに即していると思いますが、非常に分娩体制に問題があります。医師はすぐ「切開」、臍帯切断は医師がします。吸引も。助産婦業務確立のため、助産婦はまともな頑張っているのですが、医師の意識までかえられず、現在奮闘中です。保健指導部門で

は、非常に満足しているのですが、分娩体制に対しては満足していません。

IV型 その他、特殊な問題をもつ妊産婦に対応できたことに満足を感じるタイプ

大ぜいの妊産婦の中には、神経症、入院費が払えない、退院後も援助を要するなど、特殊な問題を抱えた人が、1人2人はいて、看護職の個別の対応を迫られる。しかし、個別のケアにはなかなか手が回りかねるのも実情だろう。そんな中で、特殊な問題を持つ人に対応できたことは助産婦の満足感となっている。

以下は神経症気味の人への対応である。

・医師の問題もありますが……。第3子妊娠中に精神異常をきたし、里帰り分娩（夫婦だけ都会ぐらし）で当院受診、実母が非常に悩んでいたため、精神科受診の手続きをする（当科の医師は他科紹介を好まない）。何回か受診の後分娩となり、第3子分娩の後、嫁ぎ先の実家で生活するようになった。このケースの実母に、本院で分娩して本当によかったと言われた。（妊産婦の反応は）病状が軽快したのかも知れないが、本人は日に日に明るくなってきた。

・分娩退院後4日目に乳緊と乳汁分泌不良と疼痛に加えて精神緊張の極度にあり、発熱と不眠を訴えて大変な興奮状態の褥婦を、マッサージ法、抱き方、飲ませ方、日頃の乳房の手当等を話しながら、医師も協力して十分時間を与えて下さった。（妊産婦の反応は）混乱状態の日か

ら1週間後来院した時は、すっかり落ち着き、教えられた通り実行して乳緊、授乳等も十分になったと喜び、更に3週後も、すっかり落ち着いて育児ができる様になったと喜んで、明るい表情になって妊娠中より成長した感があった。

経済的な援助を必要とする人には、福祉事務所や他の機関との連絡をとっている。

・入院費用が払えないと訴えた人に対して病院として、とれる範囲で援助した。（妊産婦の反応は）感謝し喜んで退院。

退院後の育児不安等が予測できる人のために、施設外の看護職、他職種との連携をとることも満足感となっている。

・退院後の育児等の不安を覚えさせられるような事例であったが、保健所、市福祉課等への連絡、また訪問等し、地域に配慮して地域に帰した。（妊産婦の反応は）当人自身の人格の程度も考慮しなくてはならないが、当人自身は無反応の部類と思う。

・退院していく褥婦の問題点について、保健婦や開業助産婦とその日の内に連絡をとり、入院中の看護計画が継続された時。施設内外の看護者が1褥婦のため協力しあって援助し、自分が^カ_ナ^メになったこと。（妊産婦の反応は）退院した日の夕方、電話で喜びを伝えてくれた。